2019

韓日交流 作文コンテスト

한일교류 작문 콘테스트

作品集

募集は７部門

エッセイ
- 日本語エッセイ部門
- 韓国語エッセイ・中高生部門
- 韓国語エッセイ・一般部門

川柳・俳句
- 日本語川柳・俳句部門
- 韓国語川柳・俳句部門

韓国旅行記
- 日本語 韓国旅行記部門
- 韓国語 韓国旅行記部門

〔主催〕駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院
〔共催〕駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院
〔協力〕韓国観光公社
〔後援〕韓国コンテンツ振興院

2019

韓日交流 作文コンテスト

한일교류 작문 콘테스트

皆さんの想いを
伝えてみませんか

〔主催〕駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院

〔共催〕駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院

〔協力〕韓国観光公社

〔後援〕韓国コンテンツ振興院

実施概要

事業名

韓日交流 作文コンテスト 2019

～ 皆さんに伝えたい想いを書いてみませんか ～

【日程】

- 作品募集：2019 年 4 月 19 日（金）～ 8 月 4 日（日）
- 審査：2019 年 8 月 5 日（月）～ 8 月 28 日（水）
- 審査結果発表：2019 年 8 月 30 日（金）
- 受賞作展示会：2019 年 10 月 4 日（木）～ 10 月 29 日（火）
- 授賞式：2019 年 10 月 5 日（土）

【趣旨】 次世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句、韓国旅行記を募集し、表彰する。

【募集部門】　全７部門
＜エッセイ＞
　日本語エッセイ部門：中学生から一般の方までが対象
　韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
　韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

＜川柳・俳句＞
　日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象
　韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象

＜韓国旅行記＞
　日本語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象
　韓国語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象

【応募規定】
＜日本語エッセイ、韓国語エッセイ部門＞
　◇ テーマ（次の中から択一）
　　A「私が感じた韓国」、B「私が考える韓日交流」、C「私が考える両国の未来」

＜日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門＞
　◇ テーマ
　　自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

＜日本語 韓国旅行記部門、韓国語 韓国旅行記部門＞
　◇ テーマ
　　韓国旅行（韓国旅行中に感じたことや思い出、エピソードなどを各部門の言葉で旅行記にして投稿）

【審査方法】
駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

【審査員】
◇ 日本語エッセイ、日本語 韓国旅行記部門
　　呉英元（二松学舎大学名誉教授及び駐日韓国文化院 世宗学堂長）
　　桜井泉（朝日新聞記者）

◇ 韓国語エッセイ中高生・一般部門、韓国語 韓国旅行記部門
　　李允希（東京成徳大学教授）
　　南潤珍（東京外国語大学准教授）
　　武井一（東京都立日比谷高等学校教員）

◇ 日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門
　　兼若逸之（元東京女子大学教授、駐日韓国文化院 世宗学堂運営委員）
　　曺喜澈（元東海大学国際教育センター教授・駐日韓国文化院 世宗学堂運営委員）

審査結果（総応募作数：2,704 作）

日本語エッセイ部門（応募作数：259）

◇ 最優秀賞（1 名）
– 峰尾昊羽（横浜市立篠原中学校）

◇ 優秀賞（2 名）
– 猪股修平（東海大学）
– 山下美恵（神奈川県）

◇ 佳作（4 名）
– 田原彰人（埼玉県）
– 江嶋隼司（早稲田大学高等学院）
– 柴口勲（山口県）
– 普世千晶（昭和女子大学）

◇ 入選（12 名）
– 松井純子（沖縄県）
– 松田祥子（兵庫県）
– 田村光璃（宝仙学園中学校共学部 理数インター）
– 藤本麻友（田園調布学園　中学校）
– 齋藤咲希（神奈川県立横浜国際高等学校）
– 大澤香音（首都大学東京）
– 渡辺誠二（福岡県）
– 松岡爽（北海道千歳高等学校）
– 薗田徹弥（福岡県）
– 田中夏波（鳥取県立境高等学校）
– 松浦一穂（滋賀県）
– 吉川萌衣（法政大学国際高等学校）

日本語 韓国旅行記部門（応募作数：87）

◇ 最優秀賞（1 名）
– 小松崎有美（埼玉県）

◇ 優秀賞（2 名）
– 関口治花（慶應義塾大学）
– 平手亜紀世（愛知県）

◇ 佳作（4 名）
– 大西賢（東京都）
– 宮坂宗治郎（神奈川県）
– 塚野安枝（宮崎県）
– 北岡健太郎（東京都）

◇ 入選（12 名）
– 白木洋子（秋田県）
– 藤野美保子（神奈川県）
– 山極笑子（埼玉県）
– 蓮池未侑（岡山県）
– 柳澤範子（東京都）
– 安達有沙（神奈川県）
– 藤原里奈（東京都）
– 甲斐絢子（埼玉県）
– 東松宣希（北海道）
– 石原幸美（大阪府）
– 森啓二（岡山県）
– 小松崎潤（東京都）

韓国語エッセイ 中高生部門（応募作数：43）

◇ 最優秀賞（1 名）
– 田中祐衣（松本秀峰中等教育学校）

◇ 優秀賞（2 名）
– 小向蒼音（都立目黒高等学校）
– 李東映（帝塚山学院泉ヶ丘中学校）

◇ 佳作（4 名）
– 土田紅奈（長崎県立対馬高等学校）
– 大下莉奈（長崎県立対馬高等学校）
– 本田萌香（神奈川県立横浜国際高等学校）
– 池田萌々（茗溪学園高等学校）

◇ 入選（12 名）
– 玉生隼都（関東国際高等学校）
– 楠田 尚桜（大阪府立佐野高等学校）
– 池原愛（長崎県立対馬高等学校）
– 梅野純渚（長崎県立対馬高等学校）
– 谷口小秋（神奈川県立横浜国際高等学校）
– 森響子（神奈川県立横浜国際高等学校）
– 北山明志（東京韓国学校高等部）
– 石橋寧々（神奈川県立神奈川総合高等学校）
– 加藤穂乃花（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
– 嘉名侑希（帝塚山学院泉ヶ丘高等学校）
– 間瀬愛梨（滋賀県立国際情報高等学校）
– 立岡未来（滋賀県立国際情報高等学校）

韓国語エッセイ 一般部門（応募作数：103）

◇ 最優秀賞（1 名）
– 斉智司（東京都）

◇ 優秀賞（2 名）
– 矢田智子（高知県）
– 大場千尋（新潟大学）

◇ 佳作（4 名）
– 柴田由香子（青森県）
– 日野萌（上智大学）
– 保井健（東京都）
– 飯澤みくに（北海道）

◇ 入選（12 名）
– 中谷祐美子（北海道）
– 尾澤亜海（東海大学）
– 小川真未（千葉県）
– 市川英里香（北海商科大学）
– 中川美保（東京都）
– 沼波裕美（大阪府）
– 森本由紀子（大阪府）
– 新田佳南（新潟大学）
– 山田和奈（秋田大学）
– 岡林健二（高知県）
– 齋藤彩乃（新潟大学）
– 小高麻貴子（埼玉県）

韓国語 韓国旅行記部門（応募作数：66）

◇ 最優秀賞（1 名）
– 吉田紋子（広島県）

◇ 優秀賞（2 名）
– 佐藤康予（東京都）
– 古味優子（高知県）

◇ 佳作（4 名）
– 藤岡美帆（東京都）
– 中山由紀子（北海道）
– 小林友仁（鵠沼高等学校）
– 隠樹紀子（東京都）

◇ 入選（12 名）
– 武村葉子（東京都）
– 片岡久恵（大阪府）
– 相川美代子（東京都）
– 藤中篤（京都府）
– 伊藤未来（新潟県立大学）
– 五月女彩海（神奈川県立神奈川総合高等学校）
– 植松紀子（兵庫県）
– 金藤久美子（大阪府）
– 阪本礼子（東京都）
– 鷹羽まり子（大阪府）
– 吉田智佳子（大阪府）
– 楠 彩花（新潟県）

日本語川柳・俳句部門
(応募作数：1,530)

◇ 最優秀賞（1 名）
– 清水律子（福島県）

◇ 優秀賞（2 名）
– 菅原文路（埼玉県）
– 相田香菜子（神奈川県）

◇ 佳作（4 名）
– 中野弘樹（埼玉県）
– 板垣光行（新潟県）
– 川島多香子（東京都）
– 中山友里奈（埼玉県川越市立福原中学校）

◇ 入選（12 名）
– 苅谷菊子（神奈川県）
– 田村美恵（高知県）
– 大江愛奈（鳥取県立境高等学校）
– 能登智恵子（北海道）
– 棚木拓海（電気通信大学）
– 日比野優菜（鳥取県立境高等学校）
– 中島紀生（和歌山県）
– 藤野美保子（神奈川県）
– 小坂武弘（京都府）
– 白木茉莉（秋田県立西目高等学校）
– 張宇恒（埼玉県川越市立福原中学校）
– 清田弘美（神奈川県）

韓国語川柳・俳句部門
(応募作数：616)

◇ 最優秀賞（1 名）
– 後藤将司（東京都）

◇ 優秀賞（2 名）
– 國定昭（大阪府）
– 中西麻維（奈良県）

◇ 佳作（4 名）
– 新澤明子（大阪府）
– 南圭子（千葉県）
– 国原綾子（神奈川県）
– 大江千晴（東村山市））

◇ 入選（12 名）
– 武村葉子（東京都）
– 湯澤葉子（東京都）
– 丸山佐織（新潟県立大学）
– 田中葉月（新潟大学）
– 小熊彩未（昭和女子大学）
– 徳永朱香（電気通信大学）
– 中嶋直美（富山県）
– 川村文（東京都）
– 波潟世民（北九州市立西小倉小学校）
– 丸尾琹那（帝塚山学院大学）
– 中川アンナ（帝塚山学院大学）
– 仲村佳代子（新潟県）

賞

◇ 最優秀賞（各部門 1 名、計 7 名）
賞状、副賞（韓国への旅 3 泊 4 日をペアで）

◇ 優秀賞（各部門 2 名、計 14 名）
賞状、副賞（韓国への旅 2 泊 3 日）

◇ 佳作（各部門 4 名、計 28 名）
賞状、副賞（ブルートゥースイヤホン）

◇ 入選（各部門 12 名、計 84 名）
賞状、、『韓国語学習ジャーナル hana』 1 年購読権利

作品集

最優秀賞

私が考える両国の未来

峰尾昊羽〔横浜市立篠原中学校〕

心配性の両親は、僕が小学生になるまで海外旅行には行かないと決めていたのだが、小学校入学後のある日、父がぽつりと言った。

「咏畋 (チャンミン) に会いたいなあ。」

咏畋とは、高校教師をしている父の教え子である。韓国で生まれ育った咏畋は、中学生で来日した時には日本語が全く分からなかったのだが、優秀な成績で高校を卒業した後再び韓国に戻り、その後兵役に就いたと聞いた。その咏畋が突然父に連絡をしてきたのだ。除隊前最後の有給休暇が取れるから、僕の父に会いたいと。

僕は、ＦＩＦＡ韓日ワールドカップの決勝戦が行われたスタジアムのすぐ近くで生まれた。韓国とのかすかな接点はただそれだけ。韓国について何も知らなかった。時々反日感情が報道されるのを見ては怖いなと感じていた。だから、初めての海外旅行が咏畋のいる韓国に決まった時には、正直に言って、あまり嬉しくなかった。気が乗らないまま韓国の歴史等を調べて、僕は愕然とした。そして、本当にこの国は僕を受け入れてくれるのか、歴史の憤りが僕自身にぶつけられるのではないかと、言いようのない恐怖心で一杯になっていた。

そんな僕に父が言った。

「それなら、自分の目で確かめてごらん。」

2011 年、初めて訪れた韓国は大豪雨に見舞われ、飛行機が欠航にならなかったのが不思議なくらいだった。ソウルでは多くの家が浸水し、土砂崩れによる死者も出ていたことは帰国後に知ったのだが、韓国語がわからない僕たちは土砂降りの雨で東西南北もわからないまま街中を右往左往していた。すると、一人の韓国人のおじいさんが日本語で声をかけてきた。咏畋と待ち合わせをしているお店を伝えると、

「一緒に行きましょう。」

案内してくれた。その方が行こうとしていた方向はお店とは反対だったのだが、わざわざお店の前まで案内してくれたのだ。びしょ濡れでお店に入ると、びっくりしたオモニがタオルを持ってきてくれた。そして、初めて見るサムギョプサルを前に僕たちが戸惑っていると、オモニは焼き方や食べ方を教えてくれ、まだ小さかった僕には肉をフーフーと冷まして口に運んでくれた。

食事をしながら父は、咏畋が日本のことをどう思っているのか聞いた。

「峰尾先生。過去の歴史は変えられませんけど、僕たちだって歴史を作っていくんです。国に関係なく一人一人が仲良くしていけば、何も心配することないです。」

咏畋は笑顔だったが、父は泣いていた。咏畋にもいろいろ思うところがあるだろう。でもそれをぐっと飲み込んで父を慕ってくれている。僕にも、過去を理解して韓国との新しい歴史を作っていく役割があるのだ。

それ以来、僕の家族は何度も韓国に行くようになった。何度行っても韓国は僕たちを優しく迎え入れてくれる。僕の古いパスポートには、何ページにもわたって韓国の出入国のスタンプが押されている。「スタンプカードみたい」と友だちは笑うが、これは僕と韓国との心のつながりの証なのだ。

優秀賞

私が感じた韓国

猪股修平〔東海大学〕

2年前、私はハングルさえ読めなかった。が、今では韓国の友人が数え切れないほどいる。半年間のソウル留学も経験し、韓国語能力試験も中級程度をパスできた。もはや私の大学生活は韓国なしでは語れない。はて、どうしてここまで韓国に惹かれたのか。記憶を紐解いていくと、中学時代にまで遡る。

中学2年の秋、同級生がソウルに転校した。彼女は母親が韓国人で、どうやら東日本大震災の影響で韓国へ帰国する運びになったらしい。赤裸々な告白をすると、私は小学生の時から彼女に片想いしていた。教室で彼女の笑顔を見るたびに心が温かくなった。その笑顔がもう見られなくなるなんて。中学生の私にとって外国は果てしなく遠い土地だ。例えお隣の韓国であろうと、彼女が海を渡ってしまうことに悲しみを禁じ得なかった。彼女の転校後、私はふとした時に涙ぐむようになった。絶望である。

風向きが変わったのは高校入学後。友人の勧めでフェイスブックのアカウントを作った。すると彼女のアカウントが友達候補欄に表示された。二度と会えないと思っていた彼女がパソコンの画面上に出ている。思わず私は友達申請をしていた。彼女からの反応は早かった。「久しぶり。元気にしている？」。彼女のアイコンには、昔と変わらない笑顔があった。パソコン越しのやり取りは大学入学後も続いた。そして私は決心した。「彼女に会いに行こう」。しかし、ただ会いに行くだけでは格好がつかない。どうせなら韓国を身につけよう。こうして私は大学の授業と独学で韓国語を学び始めた。英語もろくにできないくせにゼロから外国語を学ぶのは無謀に近かった。それでも愛の力は何物にも勝る。1カ月でハングルの読みをマスターし、半年後には簡単な会話が出来るようになった。

大学2年の秋、私はバイト代をはたいて仁川空港へ飛んだ。初めて一人で異国の地を踏む高揚感。それに加えて数年間抱いてきた恋心は絶好調。私は意気揚々と待ち合わせ場所のソウル地下鉄2号線新林駅に向かった。新林駅の地上に出ると、彼女が居た。6年ぶりの再会だった。変わらない笑顔に胸がキュンとする。「アニョハセヨ！」。開口一番、韓国語を披露する。が、彼女の第一声は悲劇的なものだった。「久しぶり。彼氏以外の男に会うのはあまりないから新鮮だわ」。ズシン、と胸に痛みが走る。彼女は韓国で幸せな時間を過ごしていたのだ。私の片想いは再会から5秒であっけなく散った。

が、この話の結末は決して悲劇的ではない。彼女と再会した後も私は韓国語の勉強を続けた。私はいつしかハングルを読める喜びや、異国語でコミュニケーションを取れる感動の虜になっていた。そう、私は韓国語に恋していたのである。今では月に一度渡韓し、韓国の友達と飲みに行く。友人とのかけがえのない時間は韓国語が教えてくれた。私はこれからも韓国を愛し続けたい。

優秀賞

韓国語が私に教えてくれたこと

山下美恵〔神奈川県〕

「韓国語が私に教えてくれたこと」

「ママのパスポートだけ何で緑色なの？」「えっ！ママって韓国人？…..ってことは俺ってハーフ？」長男が小学 4 年生の夏休み、家族で海外旅行へ行った時の会話の 1 シーンだ。私が韓国人であることや我が家のルーツ・歴史について改めて子供達に話したことはこれまで一度もなかったことに気がついた。

私は山下美恵 55 歳。日本人の夫と結婚し 2 人の子供の 4 人家族で現在神奈川県に住んでいる。広島で生まれ日本の義務教育を受けて育った私の本名は李美恵イ・ミヘ在日 3 世になる。

祖父は大韓民国慶尚北道義城郡出身。日本で一旗揚げようと夢を抱き 1920 年家族で移住してきたと聞いている。慣れない異国の地、現実の生活は日々生きていくので精一杯。志半ば祖父は脳溢血で倒れて亡くなった。祖父が抱いていたのはどんな夢だったのだろうか。

親戚の多くは、在日としての生きにくさを捨てて帰化し、赤いパスポートを手に就職・結婚をした。日本社会の中で生きていく上での様々なわずらわしさからは免れて、生き易かったかもしれない。がしかし、そうすることは生き易さと引き換えに魂までも引き渡すことのような気がして、私は簡単には緑色のパスポートを捨てることはできなかった。いや、したくなかった。

ワールドカップでサッカーの試合を見れば、「韓国勝て！韓国頑張れ！」と応援する私がいた。理屈ではなく血が燃えたぎってくるのを自覚しないではいられなかった。

ある時、日本の友人が韓流スターに夢中になり、韓国語の勉強を始めた。熱心に勉強している姿にとても刺激を受けた。日本人の彼女でもこんなに勉強しているのに、韓国人の私が韓国語を未だ喋れないって、おかしくない？いつか時間に余裕ができるようになったら韓国語を勉強したいというぼんやりした思いはあったが、一気に目が覚めた気分だった。いつかなんて永遠に来ない！韓国語やるの？やらないの？やるなら今でしょ！と、やっと語学学校の門を叩く私がいた。

『ムゥル』＝水を習った時、今は亡きハルモニの『ムゥル』の発音を思い出し、胸がいっぱいになった。懐かしさに涙がこぼれた。舌を上顎の歯茎に付ける R の音は発音が難しく、日本人は苦戦するところだが、私は上手く言えた。とても嬉しかった。

ハングル文字が読めるようになった頃、TV で平昌オリンピックがあった。韓国と北朝鮮合同の競技で応援団が『ウリヌンハナダ！』と唱和している言葉が耳に飛び込んできたその瞬間、心の底からの深い感動に包まれた。本当に本当に、『ウリヌンハナダ！』＝『私達は 1 つ！』なのだと強く強く思った。

また、勉強を始めた頃、韓国語の勉強と称し韓流ドラマも良く観るようになった。ドラマの中でオモニ達はいつも誰に対しても挨拶替わりに言っている言葉があった。『お腹は空いていないか？ご飯は食べたか？』母に言われていた時には、ただうるさいなと思っていたこの言葉が、韓国のオモニ達みんなの愛の表現だったのだとドラマを通して知った。『ペゴパ？パンモゴッソ？』こんなにもやさしくて温かい言葉があるだろうか？

新しく覚えた韓国語で見渡すと、それまで見慣れていた日常がキラキラ輝いて見えた。簡単な言葉ほど胸にやさしく響く。まるで子供のように、新しい世界に触れる喜びに浸った。『ハヌル』空『ピョル』星『シガン』時間『ヨルン』夏『ウサン』傘…韓国語の音がとても好きだ。言葉を聞くだけで胸は高鳴る。

韓国語は私に、亡き祖父母や父母に思いを馳せることを、それがどんなに深い喜びを与えてくれるかを教えてくれた。

いつの日か両家の祖父母の故郷を訪ねてみたいと思う。百代前の先祖まで遡れる家系図の本が韓国の田舎にあると聞いている。

遠い昔、日本に夢を抱いた祖父のフロンティア精神があったから今、私はここにいる。祖父の勇気・行動力に心から敬意を表し感謝を捧げたい。私の中に流れる韓国に、そして全ての出逢いと縁合った人に感謝を捧げたい。

韓国人としての私の第 2 の人生は今、始まったばかりだ。

佳作

私が考える両国の未来

田原彰人〔埼玉県〕

休日はたいてい妻と4歳になる息子とお出かけをする。近所の公園に行ったり、電車やバスに乗ってショッピングモールに行ったり。だけどそんな休日のお出かけは、僕をそわそわさせる。
息子は韓国人であるオンマ（ママ）とは韓国語でしか話さない。そして日本人の父親である僕とは日本語でしか話さない。3人で外を歩くとき、オンマと手を繋いでいれば息子は韓国語で話しまくるし、外食のとき、オンマが会話の主導権を握れば息子は韓国語で騒ぐ。だから僕は、外では率先して息子の手を握り、外食の際は、積極的に息子に話しかける。日本語で。
そう、僕は息子が人前で韓国語を使うのを恐れているのだ。

なぜだろうか。僕はどこか、この国で韓国語を話すこと、話されることに後ろめたさを感じてしまうようだ。僕自身は大学時代に第二外国語で韓国語を学び始めた。覚えたての韓国語が新鮮で、話してみたい思いが強かったのを覚えている。日本人の友人と得意になって電車の中で話したりもした。それなのになぜだろうか。社会人になって、多様な価値観を持った人たちと接するようになったからだろうか。あるいは政治的な日韓関係の影響だろうか。

かく言う僕も妻とは韓国語でしか話さない。妻との人間関係は韓国語で形成されているからだ。今さら日本語で話すのは不自然だし、なんだか照れくさい。だから外では周囲の様子を注意深くうかがい小声で話す。韓国語で。
言葉と文化が密接な関係を持っているというのは周知の事実である。例えば、家族や親族に関する呼称がきわめて複雑な韓国語は、上下関係や血縁関係を重んじる儒教的な価値観が強い韓国文化ならではだ。一方、「僕」「俺」「私」など、一人称の呼称が豊富な日本語は、相手にどう見られるかという「空気を読む」ことに敏感な日本文化ならではだ。それだけ言語と文化は密接に結びつき、個々の人間関係を形作っているのである。ゆえに、かつて日本が朝鮮半島で行った日本語普及政策は、いくらきれいごとを並べようとも、それは相手の文化や個々の人間関係を無視した不遜な行為だったのだ。

僕と妻の人間関係が韓国語で形成されているように、息子とオンマの人間関係も韓国語で形成されている。それを無理やり変えさせてはならないし、誰にも文句を言う権利はない。冒頭で考えた人前で韓国語を話す息子へ怯えてしまう原因。それは、政治的な日韓関係や周りの人たちの反応に敏感な僕自身にあったのだ。そんな僕の態度はやがて息子にも影響を及ぼしてしまうだろう。それはオンマと息子の絆をも壊しかねない。そう、今変わるべきは僕自身なのだ。守らなければならない。大切なものたちを。それが今、両国の未来のために僕ができる一番身近な一歩なのだろう。

佳作

私が感じた韓国

江嶋隼司〔早稲田大学高等学院〕

私は、「韓国」という国にあまり良い感情を持っていなかった。良い感情を持つことができなかったという方が正確かもしれない。

「何故隣の国だというのに嫌悪的な報道が多いのだろう。もし自分のような日本人が韓国に行ったらどのような扱いを行けるのだろう」と思っていた。

そんな中で、自分の学校と韓国の学校で行われる短期交換留学プログラムを知った。私は、自分の目で韓国という国の本当の姿を確かめたいと思い、参加することを決めた。プログラムは、平日は学校の寮で過ごし、土日はホームステイをするという形態をとっていた。

そのホームステイ中に、ホストファザーがこう言いだした。

「そうだ、久しぶりにみんなで髪を切りに行こうじゃないか。」

私は、恐らく家族のみで行くのであろうと思った。するとホストファザーが私に向かって続けてこう言ったのだ。

「君も行ってみないかい？」

ホストファザーは全く押し付ける感じの口調ではなくて、僕の反応を見るように聞いてきた。行きたい気持ちはあったが、美容院代は決して安くないので、負担をかけるのは申し訳ないので断ろうとしていた。するとホストマザーがこう言った。

「お金のことは気にしないで良いのよ、韓国の割引は『１＋１』だからね！」

本当にそうなのかはわからないが、ホストファミリーの熱意に押されて、連れて行ってもらった。

このほかにも、ホストファミリーの提案から貴重な体験を沢山させてもらった。

ホームステイの最終日に、寮生活を再開するためにホストファミリーの車で学校に向かった。その時、ホストファザーがこう私に伝えてくれた。

「今回のホームステイでは、君に沢山の体験をしてほしかったから、少々乱暴気味だったかもしれないが遠慮しなくても良いように色々な提案をさせてもらったよ。髪を切るのだったりサウナだったり…。私たちも君の反応から楽しませてもらったよ。本当にありがとう。」

これを聞いて、私は感謝の気持ちを持つとともに大きな衝撃を受けた。

それは自分の韓国という国に対する考え方の変化であった。自分があのように懐疑的な心を持っていたことを、プログラムに参加してから今の今まで忘れ切っていた。ホストファザーの言葉からも分かるように、どの韓国人の方もみんな私を歓迎し、色々な体験をさせてくれた。私は、あのような考えを持っていたことを恥ずかしく思ったし、自分が今回の経験をこれからどう生かせるかを考えるようになった。

今、自分はまた韓国に行く計画を立てている。もちろん観光のためでもあるが、それだけでなく、あの時のホストファミリーに会い、こう伝えるためでもある。

「次は皆さんが日本に来てください！そして、次は私が皆さんに提案を沢山させてください！」

と。

佳作

隣国の隣人

柴口勲〔山口県〕

ソン会長さま

釜山芸術祭に下関市から詩の朗読で参加をしました柴口と申します。懇親会で卓上のバラを拝借して会長の胸ポケットに入れたあの愚か者です。この度のお礼も兼ね、ペンをとっています。

帰路の空港で告白しましたが、私は釜山に着いた日にケータイを落としました。すぐに通訳に伝えると彼女は自分のことのように動いてくれ、窮地を察した他のスタッフも私の道のりを遡って捜してくれました（開幕式１時間前だったにも関わらずに）。でも見つからず警察を頼ろうとしましたが、ケータイの紛失は韓国の警察の管轄外でした。

現代人がどんなにケータイに依存しているか。それを異国で気づかされました。友人・知人・店などの連絡先、スケジュールや大切な写真もそこに入っています。電子マネーの取引も可能だと思うとゾッとしました。

釜山の三日目。通度寺に案内されました。その日は入口左右に箱があって参拝者が願い事を書いたお札をそこに入れていました。それに習おうとすると「日本語で書いてもお坊さんには読めないよ」と友人は笑います。それでも書いて入れました。「家族が幸せであるように。ケータイが戻りますように」と。

翌日の出発の７時間前。眠れずにホテルの PC から Facebook にログインすると…アカウントを乗っ取られていました。「私はパクです。ケータイを持っています。連絡を下さい」と書き込まれていたのです。悩んだあげく恐々その連絡先に電話を入れ、私が釜山外国語大学に着いた頃には日付変更線が過ぎていました。

タクシー内に落ちていた私のケータイはドライバーの機転で釜山外国語大学に届けられ、日本語を学ぶ学生パクさんに渡り、彼の閃きと勇気で私の手元に戻りました。「このケータイの壁紙にある娘さんの写真を見ているとどうしても返したいと思いました」と彼。初めての国で、見知らぬ若者に、片言の日本語でそう言われ、涙腺の緩まない父親がいるでしょうか？（外が真っ暗で良かった）。

大学の長い坂を一緒に下りながら、彼らが集めているという外国人へのインタビューを受けました。

Q「釜山で一番美しいものは何でしたか？」

A「今この坂から見える夜景はとても綺麗ですが、その光の中にいる人たちこそ美しいと知りました」

Q「韓国で一番美味しかったものは何ですか？」

A「沢山ありますが、通度寺でバスを待っているときにスタッフがくれたビスケットです」

Q「韓国はどんな国でしたか？」

A「失くした何かが帰ってくる国でした」

別れ際にウォン札を彼に渡そうとしましたが「そんなことしてはダメです」と一切受けつけてくれません。そのときの彼は、お金を渡そうとした行為を恥ずかしく思うほど清らかでした。

熱い歓迎と素晴らしい試練？を与えて頂き、本当に有難うございました。あぁ帰国してもう、韓国が恋しいです。

柴口勲

追伸

下関市から芸術文化振興奨励賞を頂くことになりました。釜山から「幸運」も一緒に持ち帰ったようです。

佳作

私が考える韓日交流

普世千晶〔昭和女子大学〕

私が初めて韓国を訪れたのは、18 歳の頃。アメリカやイギリスなどの英語圏の国には憧れがあったが、それまで韓国には行きたいとも思っていなかった。私が小学生の頃にも 1 度 k-pop ブームはあり、日本中が夢中になり、私もそのうちの 1 人だった。しかし、それからは、正直韓国に対して、良いイメージはなかった。日本と韓国には、外交的に竹島や慰安婦に関する問題があり、反日デモや慰安婦像の設置などさまざまなことがあったからだ。

ではなぜ私がこんなにも韓国や韓国語に興味を持ち、勉強しているのか。

それは 1 人の人に会ったことがきっかけだった。その人は私の大学に留学生として来ていたオンニだ。私が国際交流グループに所属していた時、留学生の歓迎パーティーで友だちになった。同じ k-pop グループが好きということもあって、すぐに仲良くなった。

1 年間留学していたオンニとはたくさん出かけた。k-pop のイベントのために、一緒に東京ドームや東京タワーに行った。また、お互いの家に遊びに行った。

もしかしたら、それはただ共通の趣味があるから仲良くなれたのではないかと考える人もいるかもしれない。確かに友だちになったきっかけは同じ歌手が好きということだった。しかし、それだけではなかった。日本語を勉強しているオンニと、韓国語を勉強している私。私たちはお互いの国の言語を学んでいる。お互い自分にないものを持ち、それを補い合える存在なのだ。

オンニは留学を終え、今は韓国に住んでいる。今でも日本に住んでいた時のように、頻繁に会うことはできないが、連絡は取り続けている。そして、住んでいる国は異なっても、勉強面で、お互いを刺激し合えるオンニとの関係は変わらない。

そして、私にとってのもう 1 つの幸せなことは、オンニの家族に出会えたことだ。今年の春休みに語学研修のために渡韓した時、はじめてオンニの家族と会った。今まで韓国人の友だちはいても、韓国人の家族と韓国語で話す機会はなかった。オンニの家族は私のことをとても暖かく迎えてくれた。そして、私の片言の韓国語を一生懸命に聞いてくれた。もともと、私は、韓国人の大人たちは日本人のことを嫌い、不親切だというイメージを持っていた。一部そのような人がいるのも事実だが、実際そのような人は少ない。これまでの韓国旅行の中でも親切な人に出会った。そして、オンニの家族に出会って、共に食事をし、今まで以上に韓国人の温かみを感じた。

悲しいことに、未だに日本と韓国は政治的には解決すべき問題がいくつもある。日本のニュースでは反日の韓国人のことばかりがニュースになっている。その一方で、日本人がヘイトスピーチしていたという事実もある。慰安婦問題など歴史上の悲しい出来事はこれからも変えることはできないが、これからもオンニとその家族と交流を続けることが日本と韓国の関係が良くするための一歩だと思う。

最優秀賞

正義の白虎

小松崎有美〔埼玉県〕

「トラに会いたい」

そんな思いを叶えるため、昨年末親子三人で韓国を訪れた。私たちが目指したのは韓国最大級の人気テーマパーク「エバーランド」だった。中でも 一歳の息子は出発前からトラに会えると大興奮だった。韓国において虎は、悪を追い払う守り神だと聞いていたが、息子にとってもまさにヒーローだった。

当日、エバーランドまでの交通手段は言葉が話せないとあって、直通のシャトルバスを選んだ。人と活気で賑わう明洞駅の停留所。朝９時４０分、そのバスが来た。しかし車内は観光客でごった返し、息をするのも忘れるほどだった。最初は立っていた息子も次第に抱っこをせがみ、挙げ句の果てには泣き出した。この時、朝食をしっかり食べさせなかったことを激しく後悔した。しかし今ここでお菓子やジュースを与えるわけにはいかない。私はぐっとこらえて「あとちょっとだから」となだめた。しかし息子も負けてはなかった。もうあたりかまわず獣のように泣きわめいたのだ。すると背中になんとなく冷ややかな視線を感じた。さらに日本語以外の言葉でクレームをつける様子も見られた。何と言ってるかはわからない。だけど怒っていたのは確かだった。言葉は通じなくても感情は伝わるのだ。私は必死で息子の頭からバスタオルをかけた。だけど息子はそれさえ取っ払った。そのときだった。背後の女性がマスコットのついたキーホルダーを息子の前にぶら下げた。それは平昌五輪のマスコット、白虎のスホランだった。それを見るなり息子はピタリと泣き止んだ。

「とらだあ」

それから女性はスホランを息子の頬に近づけたり、目の前でクルクル回したり、まるで曲芸のように楽しませてくれた。息子はヒーローを見るかのように目をキラキラさせて喜んだ。気づけば車内はさっきの冷ややかさが嘘のように、拍手のような温かさに包まれた。女性と別れるとき私は言葉にならないほどの気持ちでいっぱいだった。カムサハムニダという言葉ではとても足りなかった。だから両手を合わせて頭を深く下げた。ありがとう、ありがとう、どうもありがとう。言葉は通じなくても心は通じると信じた。女性は笑って手をふった。

この旅で私は考えた。万が一、言葉の通じない国で困った人を見かけたら私たちには何ができるだろう。たとえ空腹だとしても、狭い車内では腹も満たしてやれないし、渇いた喉を潤すこともできない。ましてや公共の場ではお菓子をあげることもできない。だけど女性は教えてくれた。言葉が通じなくても人の手だからできることがあるって。それは頭をなでたり、心をくすぐることなのかもしれない。スホランのキーホルダーに心をくすぐられた息子の笑顔からもそう感じた。

あれからホテルに帰っても息子は女性とスホランで遊んだことを興奮ぎみに話していた。動物園の虎には会えたが、本当の白虎はあのバスの中の女性だったと思う。

優秀賞

絆

関口治花〔慶應義塾大学〕

「辛い。やめたい。」あの時私は、暇さえあればこの言葉を吐き出していた。そう遠くない輝かしい未来が、韓国で私を待っていることを知らずに。

あの時というのは、大学 3 年生の夏休みだった。私は所属するゼミで、同期のゼミ生 5 人と一本の共著論文を執筆する日々。いくらゼミ活動の一環であるとはいえ、私にとって、毎日同じ人と顔を合わせながら机に向かい、論文を執筆することは困難の連続だった。何度も仲間とぶつかり、何度も喧嘩をし、何もかも上手くいかない、そんな状況がいつしか私の「辛い。やめたい。」という感情になっていった。

でも、そんな私には夢があった。私だけではない。チーム全員、一人一人が叶えたいと願う夢があった。その夢を夢で終わらせないと何度も胸に叩き込み、ただがむしゃらに泥臭く前だけを見続け、私たちは夢が現実になった瞬間を迎えた。私たちの力で夢を現実にした、「韓国での国際学会への出場」だ。半年間にわたり書き上げた論文を投稿し、受領通知を受け取った時は心の底から嬉しい気持ちで一杯になった。こうして私たちは、夢に見ていた国際学会の場、韓国へと飛び立ったのだ。

「Korean Scholars of Marketing Science」と書かれた横断幕が垂れる韓国の延世大学を目の前に、仲間の肩を抱いて円陣を組み、緊張感を押し殺して本番を迎えた。ステージから見える景色には、私たちの研究を頷きながら熱心に聞いてくださっている韓国人の学者の方々が映っていた。何とも素晴らしい、夢のような光景である。そして鳴りやまない拍手が聞こえてきた瞬間に、苦楽を共にしてきた仲間と友に涙を流して喜び合った。その時私が気づいたものは、隣に立っている仲間 5 人の存在の大きさではなかった。この学会発表をする以前から仲間の大切さに、私は毎日のように気づかされていたからだ。それよりも私が肌身で感じたものは、韓国人の人柄の良さと、あたたかさだった。学会後、食事の席で学者の方と一緒になり、不慣れな韓国語で私は精一杯の感謝の気持ちを伝えると、学者の方は私たちに「Nice team!」と言って手を差し出してくださった。

「辛い。やめたい。」、そんな言葉は私の心の中にはもうなかった。「楽しい。もっと頑張れる。」、心の中で、まだちっぽけな自分が笑って叫んでいた。

韓国という国は私にとって、大切な仲間と共に新しい世界を見させてくれた唯一の国である。一生に一度の経験をさせてくれた、そんな国である。やっぱり私は、ゼミも、仲間も、韓国も、全部心の底から大好きだ。これからもずっと、この想いは決して変わらない。

優秀賞

旅先迷子で知ったこと

平手亜紀世〔愛知県〕

私にとって韓国は特別な国だ。なぜなら初めて海外一人旅をした地であり、旅史上最大の“やらかし”をした地でもあるからだ。

当時は韓流ブームの真っ只中だった。ソウルを訪れる日本人旅行者は多く、現地発着の日本語ツアーも充実していた。私はその中でも人気の「ドラマロケ地を訪ねるツアー」に参加したのだが、道中で迷子になるという大失態をやらかしたのだ。

「再集合時間になってもバスに戻ってこないお客さんは、置いていきますよ。バイバイですよ～」

下車解散前にはガイドさんの軽口を笑えたが、もう笑えなくなっていた。船着き場でオロオロ、焦りと不安で冷や汗ダラダラ、心臓はバクバク。半ばパニック状態で思いついたのは、韓国観光案内電話へのコールだった。無論、観光案内所が迷子（正しくは迷い大人）を救済してくれると思ってはいなかったが、とにかく不安な気持ちを誰かに打ちあけたくてたまらなかったのだ。

すると対応してくれた女性スタッフさんは、「エェ？」と一瞬、沈黙。しかしその後には「それはご不安でしょう。私が一緒に解決いたします」と頼もしい言葉をくれた。そこから先は見事なファインプレー。どこの旅行会社に申し込んだツアーなのか、ガイドさんの名前は何だったか、今どこにいて何が見えるのか e.t.c…。シドロモドロの私から情報を引き出すと、電話口の向こうの誰かにテキパキ指示を飛ばしてくれているようだった。数分後には参加ツアー会社を突き止め、ガイドさんの携帯電話に連絡をとるというスゴ技をやってのけてくれたのである。

状況が落ち着き、ガイドさんの迎えを待つ間も「日本のどちらからお越しになったのですか？」「韓国の食事は口に合いましたか？」など、絶えず声を掛け続けてくれた。おそらくそれは私を和ませ、不安や緊張をほぐすための配慮だったのだろう。無事ガイドさんと合流できたとき「お手伝いできてよかったです！では、よい旅を！」と彼女は私以上に喜んでくれた。電話の向こうからは、拍手の音やケンチャナ？チャレッソ！という声も聞こえた。直接応対した彼女だけでなく、その周囲の多くの人までが私のことを気にかけ、チームプレーで尽力してくれていたのだ。

この一件以来、私は大の韓国好きになり毎年のように訪韓している。そして旅行中、一度は観光案内所を訪ねるのが旅の決まりごとだ。スマホやパソコンがあれば必要な情報は瞬時に何でも手に入る時代であるが、心に残る旅とは情報によってつくられるものではなく、情によってつくられるものだと実体験をもって私は知っている。誰かの力になりたい、笑顔になってもらいたいという人が集結し、人から人にしか伝えられない熱にあふれる観光案内所は間違いなく行くべきスポットなのだ。足を運ぶごとに、あの“やらかし”経験を鮮明に思い出し、人は人に守られ支えられ生かされているという思いと感謝を改めて胸に刻んでいる。

佳作

ジュース売りの女の子

大西賢〔東京都〕

数年前、一人で韓国のプサンに旅行に行ったことがあった。プサンは大きな街だ。繁華街も人でいっぱいだった。人混みを歩いているとだんだん喉が渇いてきて、カフェに入りたくなった。

何気なく道ばたに目をやると、小さなお店でフルーツを切っている女の子がいた。どうやら、切りたてのフルーツでジュースを売っているようだ。これは美味しそうだと思い、買ってみることにした。

パイナップルのジュースを買うと、女の子のほうから話しかけてきた。日本から来たのか、と尋ねてきたのだ。そうだよ、と答えると、彼女は流ちょうな日本語で、

「あたし、日本大好きデス」

と言った。彼女は日本のアイドルが大好きで、独学で日本語を勉強したのだという。

若い女の子が路上で果物を切ってジュースを作り、必死に販売する。大変な仕事だと思う。

「仕事、とても大変そうですね」

と私がいうと、彼女は一瞬、キョトンとした表情になり、そしてこう答えた。

「たしかに仕事は大変だけど、家族全員が健康で、夕食は家族みんな笑顔で食べられる。これ以上の幸せはないから、特段、自分が不幸だとは思っていない」

私はこれまで、韓国は「大変な国」だと思っていた。日本以上の格差社会と激烈な受験競争。生き抜くだけでも、大変な努力を要する国だと思っていた。

だが、彼女は違った。仕事そのものは大変だが、なによりも大事な家族が健康なのだ。そしてその一番大切な家族と、笑顔で夕食を食べられるのだ。彼女は、これ以上の幸福や贅沢を求めていなかった。家族の健康と笑顔。それだけで彼女にとっては充分なのだった。

韓国の人の家族愛の強さには、ある種の感動すら覚える。日本人も親は我が子を愛し、子供は親を愛しているが、韓国の人の家族の結束はまた別の次元を感じさせた。たとえ労働が過酷であっても、家族が笑顔で健康でいてくれさえすればいい。簡単に言えそうで、実はなかなか言えないセリフである。

彼女が一時間必死に働いていくらもらえるのか、私には分からない。だが、路上で必死にジュースを販売する彼女の表情から、悲壮感は見られなかった。

「ごちそうさま。家族を大切にね」

ジュースを飲み終わって彼女にそう言うと、彼女は

「ハイ、家族が一番大事デス」

と笑って答えた。

プサンの街角で、私は韓国の女の子から、人としてとても大切なことを教わったような気がした。

佳作

プサンの海と海産物

宮坂宗治郎〔神奈川県〕

海、海産物が好きだった私はプサンへと旅に出ることにした。そんなプサンの旅でも一番行ってみたかったのは太宗台だった。

私はプサンのホテルを出て、バスを乗り継ぎ、太宗台へと向かった。しばらくすると、海を見下ろせる高さまでバスが登り、太宗台へと到着した。バスから降り立つと、最初に海風の匂いがして、海好きの私にとっては心の洗われる瞬間であった。目の前には石造りの太宗台と彫られた柱が見え、周囲を観光客の人が写真を撮ろうと囲っていた。

私は入口からしばらく一本道のようになっている緩やかな坂道を登った。すると、景色は突然開き始め、見渡す限り広大な海がそこにはあった。その広大な海には、プサンならではと感じる多くの漁船が浮かんでいた。この光景は日本にいて見たことはなく、新鮮さを感じていた。

海風が心地良かった。太宗台の海沿いを歩いていると、海風が心の奥底まで吹き抜け、心が軽くなっていった。
海沿いをしばらく歩くと、灯台と岸壁が見えてきた。岸壁は岩場になっていて、随分下まで降りることができる。私は岩場まで降り、海を眺めていた。さっきまで広大な海を見渡していたが、岩場まで降りると、波の音と海面が目の前に現れ、海の匂いが濃くなった。真っ直ぐと遠くを見れば、大きめの漁船が何台も浮いていた。漁船と海の匂いが海の幸を思わせ、お腹が空いてきていた。

岩場の周囲を見ると、見計らったかのようにプサンならではのお食事処がそこにはあった。岩場に人が座れるよう板を敷き、テーブルが置かれていた。岩場から海を眺めながら、韓国の海鮮料理が食べられるようだったので、もちろん食事することにした。私はプサンへ海と海産物を堪能しにきたのだ。まさに最適の場所だった。

注文はもちろん海産物中心に牡蠣、海鮮物のキムチなどを注文したが、一つだけ韓国にきたからには一度試してみたい料理があった。日本人としては普段食べないので、勇気がいるものだったが、タコの踊り食いであった。注文すると、ばっちり動いていて、少し恐怖心さえあり、口に入れてみると、本当に口の中を踊り出し、最初は「うわっ、気持ち悪い。」と一瞬思ったものの食べてみると、段々おいしさがわかり、最後は「おいしい。」と声に出していた。日本にいる韓国の友達からタコの踊り食いを食べたいと、しょっちゅう聞かされていたが、気持ちがわかった気がした。案外癖になる食べ物だと思った。しかしながら、初めて食べたので、冒険心に打ち勝った自分を少し称賛していた。

私のプサンの旅は、充実するものだった。海も海産物も堪能して、それらは韓国プサンとしての海と海産物だった。何よりこの旅は、私の心を軽やかにしてくれた。

プサンへまた訪れようと思う。まだ見ぬ海と海産物を求めて。

佳作

～人々の優しさに触れて～

塚野安枝〔宮崎県〕

今回の旅行ほど、心の琴線に触れた旅をこれまでに体験したことがない。

韓国・ソウルへの旅行を決めた２０１９年７月。日韓関係は明らかに良好とは言えない状況になっていた。出発の日が近づくにつれ、新聞やテレビでは、不安な気持ちを煽るような話題ばかりになり、家族や友人から行かないように促された。しかし、準備を進めるうちに、旅への思いはさらに募り、強行することに決めた。いざ決めたものの、実際は、当日まで出発を悩んでいた。なぜなら、４歳になったばかりの娘を連れて、２人きりで国内旅行さえ行ったことがなかったからだ。

４泊５日の個人旅行。家路に着き、写真やビデオを眺めてみたが、そこには写っていない多くの記憶が私の心に残っている。その中でも、一番印象深いのは旅二日目。永登浦の宿泊先から明洞の宿泊先へ移動した時のことだ。宿泊先のフロントでは、地下鉄移動を勧められたが、娘が「もぐらさん電車」を極度に嫌がったため、市バスを利用することにした。宿泊地からバス停まで、炎天下、高湿度の中、大きなリュックを背負った二人の親子を現地の人は、どう見ているだろう。私は一方的に疎外感を感じていた。バス停に着き、待つ。待てど暮らせど、来るはずのバスが来ない。何かの手違いでバスの車両番号を間違えていたことに気付いた時は、もうだいぶ時間が経っていた。疲れと暑さと眠気で、娘はぐずり始め、抱っこしてもあやしてもどうにも手に負えない状況になった。すると、隣に座っていた年配の女性や通りすがりのおばあさんが、次から次に声をかけてきた。韓国語で突然言われた私は、理解できず、きょとんとしていたが、一人は、娘のリュックを肩から下ろし始め、一人は、私のリュックの脇に入れてあったペットボトルの水をさし、飲む真似をした。それまで、ぐずっていた娘は、二人のおばあさんを目の前に、目をぱちぱちさせ、じっとその顔を眺めていた。その時、私の中で、勝手に作っていた壁が静かに消えていった。言葉がわからなくても、自分のことを気にかけてくれる二人のおばあさんから、娘はすぐさま、愛情を感じ取ることができたのだ。それは、「都城のおばあちゃん」にそっくりな表情をして、娘を気にかけてくれたからだと思う。

私は、「カムサハムニダ」と言いながら、何度も頭を下げ、バスに乗り込んだ。

今回、旅の途中、様々な年代の人から助けていただいた。駅に着いたら、あの親子に伝えてくれ、とバスの運転手にささやいてくれた青年。切符の販売機を前に、娘を抱っこしながら困っていたら、代わりにボタンを押してくれた中年女性。

名前も知らない、その場限りの人々。でも、私は、その優しい，温かい気持ちを絶対に忘れない。写真やビデオと同じように、大事に私の心に残しておきたい。そして、娘が大きくなったとき、たくさんの人から、もらった優しさを語り継いであげたいと思う。

佳作

初めての「祖国訪問」

北岡健太郎〔東京都〕

今回の韓国渡航は四度目だ。

しかし、自分の実の祖父が、本当は在日韓国人だった、という事実を知ってからは初めて訪れる。つまり、「初めての」祖国訪問である。

私の実の祖父は、慶尚南道統営市を本籍とし、京畿道平澤市を本貫としていた。その祖父は、母がまだ赤ん坊の頃に徴兵され、ラバウルで戦病死していた。

その事を知った私は、どうしても統営と平澤を訪れたいと思った。そうして、今回の三泊四日の旅が始まった。

ソウルから平澤までは、ＫＴＸ(新幹線)ですぐだった。特段何かを見る事もなく、港の近くのホテルに泊まった。祖父は「平澤林氏」であるが、唐の長安から平澤に来た林八伋が始祖であり、その林八伋の碑がある、というのを中国語のサイトで知った為、それを探す事が目的だった。

翌朝、港に行って、その碑を探したが見つからなかった。輸出されるのを待つ自動車の群れを見ただけであった。

その後、全羅北道益山市に向かった。曽祖父の戸籍謄本を韓国大使館から取り寄せたのだが、曽祖父が益山で産まれた事が分かっていたからだ。益山では、三一独立運動記念公園や檀君聖壇を見学し、曽祖父が住んでいた場所を訪れてみた。何もない原っぱであったが、朝鮮の大地を踏みしめているという感覚があった。この土地に多くの先祖が暮らしていたのであろう。百年経って、日本から子孫が訪れる事を曽祖父は予想していただろうか、などと思いながら益山の大地を歩いた。

最後の目的地は統営だ。新幹線で順天まで行き、そこからバスに乗った。朝鮮半島でも南端まで来ると、人々の顔付きも大分日本人に似ている。また、方言も大分強いようだ。もっとも私は韓国語を殆ど聞き取れないが。

豊臣秀吉を撃退した李舜臣の像が、祖父の本籍地に立っていた。そもそも、「統営」という地名自体が、李舜臣が陣営を置いた事に因んだものだと言う。その統営を本籍とする祖父が、日本兵として戦死した、というのは何という歴史の皮肉であろうか。

統営で人生の後半を送った曽祖父は、名物の「忠武キ☒パブ」を食べたであろうか、と思いつつ、私も食べてみた。適度な辛さでとても美味しかった。李舜臣に因む、「洗兵館」や「忠烈祠」を訪問し、復元された亀甲船を見て、帰国の途に就いた。

今回の旅は二十年ぶりの韓国だった。変わっているところもあり、変わっていないところもあった。しかし、今までは「外国」に過ぎなかった韓国が、今回の旅によって、「第二の祖国」となった。帰国後、大学時代にかじって挫折したハングルの参考書も買い直し、「第二の母国語」の勉強も始めた。

今回の旅では、ガイドブックに載っているような観光地は殆ど見ていないが、何もない益山の大地を歩いた事が一番印象的だった。自分が、韓国の大地と魂の深いところで繋がったように感じられた。

最優秀賞

어떤 미래, 서로 손을 잡는 미래

田中祐衣〔松本秀峰中等教育学校〕

“그해 밤 별빛은
우리가 있던 자리를 밝힐 수는 없었지만
서로의 눈으로 들어와 빛나기에는 충분했습니다”

시인 박준의 시집 ‘운다고 달라지는 일은 아무것도 없겠지만’ 중 ‘그해 여수’ 라는 시이다. 처음 읽었을 때, 뭐라고 표현할 수 없는 그런 감각이 들었다. ‘양국의 미래’ 라는 에세이를 어떻게 써야 할지 고민하고 있었을 때, 이 시가 훅 생각 났다. 이 시를 통해 한국과 일본의 관계를 볼 수 있었다. 과거가 아무리 깜깜하고 어두웠더라도 지금 중요한 것은 앞으로의 미래를 향해 서로가 함께 서있는 길을 마주보며 받아들이는 것. 걸어갈 것. 이때까지 짊어져왔던 문제를 풀어갈 길을 비춰주는 별빛이 꼭 나타나줄 거라는 생각을 했다.

나는 어렸을 때부터 한국을 많이 좋아했다. 한국 문화를 통해 한국어를 접하다 보니 나도 모르게 한국어를 배웠다. 그래서 한국 친구들도 많이 생겼다. 양국 사이에 어떤 문제가 있든지 없든지 상관없이 우리는 친해졌다. 가끔 이런 생각이 든다. 우리는 이렇게 친하게 잘 지내는데, 왜 정치가 얽히면, 나라가 얽히면 잘 안 되어가는지. 많은 사람들이 얽히는 정치적 문제는 쉽게 해결 못하는 것을 잘 안다. 다만 역사를 돌아보면 이러한 문제들은 사람들이 만든 문제다. 사람들이 만든 문제는 사람들이 꼭 해결할 수 있다고 생각한다.

정치관계는 지금도 좋다고 말하기 힘든 상태이다. 많은 문제들이 한국과 일본을 둘러싸고 있다. 하지만 일본에도 한국에도 서로를 좋아하는 사람들이 있는 것은 분명하다. 나 그리고 일본을 좋아해주는 나의 한국 친구들처럼. 중요한 것은 서로의 의견을 귀담아들어 의논을 하는 것이다. 싸움 말고, 의논. 나라 간에 문제로서 생각하지 말고, 사람과 사람 간에 문제로서. ‘과거’ 를 바꿀 수는 없고 ‘미래’ 는 알 수 없는 법이지만 미래를 바꿀 수는 있다고 생각한다. 요즘 일본 젊은 사람들에게 한국 문화가 많이 유행하고 있다. 일본에 한국의 문화를 좋아하고 받아들이는 청소년들이 많다는 것이다. 이 청소년들이 시간이 지나 어른이 되어 일본, 양국의 미래를 맡게 될 것이다. 문제들을 잘 마주보고 고정된 생각을 버리고 서로 노력하면, 옛날보다 더 양국을 이해하고 좋아하는 그런 세대가 나라를 맡으면 조금 더 서로 양보하고 다가갈 수 있을까 싶다. 이 양국 관계 때문에 슬퍼하는 사람들이 없어졌으면 좋겠다. 그렇게 되길 바란다. 과거를 밝히지 못해도 미래를 밝히는 별빛처럼.

優秀賞

내가 생각하는 양국의 미래

小向蒼音〔都立目黒高等学校〕

요즘 젊은이들에게 “한일의 미래에 대해서 어떻게 생각해요?” 라고 물어보면 좋은 대답은 없을지도 모른다. 왜냐하면 우리에게 보여지는 것은 양국의 훌륭한 사람들이 회의를 하는 모습, 들려오는 것은 주로 비판적인 의견이 많기 때문이다. 이것은 이전의 내 생각이기도 하다. 그러나 정말로 그럴까? 내 생각은 하나의 경험을 통해서 크게 바뀌었다.

작년 여름 내가 다니고 있는 학교에서 한국인 고등학생과의 한일 교류회가 있었다. 이 교류회를 통해서 알게 된 것이 두 가지 있다.

교류회에 참가한 한국 학생들 중에는 일본어를 공부하고 있는 사람도 있었고 일본어를 전혀 모르는 사람도 있었다. 물론 우리들 중에 한국어를 할 수 있는 학생은 거의 없었다. 그런 가운데 우리가 하루를 함께 보내고 있었을 때 말도 통하지 않는 난생 처음 만난 외국인과 즐겁게 이야기를 하고 있는 모습에 너무 놀랐다. 학생들은 자신 들이 알고 있는 단어, 영어, 그리고 몸짓, 손 짓을 최대한 사용하여 상대 방에게 무엇인가를 전하려고 하고 또 상대방을 이해하려고 하고 있었다. 아마도 상대를 또 상대방의 나라를 알고 싶다는 생각이 그렇게 시켰을 것이다. 그리고 그때 한일 교류란 양국을 알려고 하고 배려하고 양보하려고 하는 마음이라는 것을 알게 되었다. 이것이 첫 번째이다.

두 번째는 내가 한국어를 섞어 동아리 대표로 인사를 했을 때다. 이야기를 하는 나를 반짝반짝 빛나는 눈으로 쳐다보고 있던 여학생이 있었다. 그 여학생은 일본어도 능숙하고 일본에 많은 관심을 가지고 있는 것 같았다. 내 이야기가 끝난 후, 그 학생은 나에게 “일본인이 한국에 흥미를 가지고 한국어를 공부해 줘서 너무 기뻐. 나도 더 열심히 할게!” 라고 말했다. 그건 내가 그 학생을 보면서 느꼈던 것과 똑같았다. 이 세상에는 나와 같은 생각을 가지고 있는 학생이 많다는 것. 그리고 이런 학생들에 의해 미래는 만들어지는 것. 이것이 내가 두 번째로 깨달은 것이다.

이번 한일 교류회에 ‘반일’ 과 ‘혐한’ 이란 말은 존재하지 않았다. 앞으로 양국의 미래를 짊어질 사람은 우리 학생이다. 어른이 만든 말이나 개념에 얽매일 필요는 없다. 이번 한일 교류회 이후에 일본과 한국에 대해서 알고 싶은 마음이 더 강해져서 대학 진학 후에는 이런 부분들에 대해서 자세하게 공부하고자 한다. 또한 만약 모두에서 말한 질문을 받는다면 난 이렇게 대답할 것이다. “양국의 밝은 미래는 우리가 만들어 간다” 라고 말이다.

優秀賞

하나하나의 작지만 소중한 만남

李東映〔帝塚山学院泉ヶ丘中学校〕

나는 일본 오사카에서 태어나고 자랐다. 초등학교도 그랬고 중학교도 일본 학생들이 다니는 보통 학교에 다닌다. 학교 친구들은 나에게 “내 이름은 한글로 어떻게 써?” 하고 묻거나 자신들이 좋아하는 케이팝 아이돌 글을 복사해 와서 여러 질문을 한다. 이때면 조금은 귀찮아도 매일 한글 단어를 하나씩 외우고 잔 내가 조금은 자랑스럽다. 이렇게 친구들이 나를 통해 한국을 본다. 그래서 나는 좋기도 하고 긴장도 된다. 하지만 내 친구들이 케이팝과 한글에 관심이 많아서 기분이 좋다. 친구들을 가르쳐 주려면 나도 공부를 해야 한다. 내가 생각하는 두 나라의 교류는 이런 작은 만남 하나하나가 중요한 것 같다. 우리 같은 학생들이 나중에 크면 두 나라를 이끌어 나갈 테니까.

어느 날 집에서 가까운 사야마이케(狭山池)의 축제가 있어 놀러 나갔다. 그때 사야마이케가 전라북도 김제의 벽골제와 같은 방식으로 만들어졌고 그 옛날 백제인이 들어와서 인공 저수지 만드는 법을 가르쳐 주었다는 것도 알게 되었다. 내 주변에는 한국인들이 거의 없다. 하지만 내가 자주 산책하는 이 호숫길을 백제인들이 와서 가르쳐 주었다니 기뻤다. 그리고 이 날만 사야마이케에서 보트를 탈 수 있었는데 한국인 유학생 형들이 자원봉사로 어린이들에게 배를 저어주고 있었다. 이 형들은 아이들과 재미있게 이야기하며 노를 젓고 있었다. 형들이 멋있어 보였다.

또 하루는 오사카 시내에 친구와 놀러 갔는데 여행 온 한국인 형들이 길을 헤매고 있었다. 어느 친절한 사람이 도와주고 있었는데 둘은 말이 통하지 않아 곤란해하고 있었다. 그래서 내가 그 형을 도와주었다. 목적지까지 그 형과 같이 걸으며 이야기를 했는데 그 형은 일본어를 못 해도 일본 사람들은 친절하니까 괜찮을 거라고 생각하고 여행을 왔다고 했다. 말이 통하지 않아도 그 나라 사람들을 믿고 여행을 올 수 있다니 나는 참 멋지다고 생각했다. 일본 사람들도 한국 사람들을 믿고 한국말을 못 해도 여행을 갈 수 있으면 좋겠다고 생각했다.

이렇게 한국과 일본의 교류는 한 사람 한 사람이 만들어 나가고 있었다. 작지만 소중한 이 만남들이 모여 우리가 어른이 되면 지금보다 더 서로를 알고 이해하고 있을 것 같다.

나는 한국 사람이지만 태어나보니 일본 오사카였다. 이것도 다 뜻이 있겠지. 하루하루를 즐겁고 뜻깊게 보내어 나중에 어른이 되면 나의 모국과 내가 태어나고 자란 일본을 이어주는 무지개 역할을 하고 싶다.

佳作

내가 생각하는 한일 교류

土田紅奈〔長崎県立対馬高等学校〕

저는 대마도라는 섬에서 고교생활을 보내고 있습니다. 대마도는 한국에서 가깝고 편하게 올 수 있기 때문에 연간 약 40 만 명의 한국인 관광객이 여행을 즐기는 곳으로, 저는 대마도가 바로 '일한교류의 장' 이라고 생각합니다. 저는 지금까지 많은 행사에 참가해 왔는데 그 중에서도 가장 기억에 남은 것이 있습니다. 그것은 대마도에서 매년 개최되는 국경 마라톤입니다.

작년의 마라톤 대회는 악천후에도 불구하고 양국에서 많은 선수들이 모였습니다. 저는 선수들을 보고 일한 교류에 대해 관심이 있는 사람이 이렇게나 많이 있다는 것에 놀랐습니다. 또한 국적에 상관 없이 서로 힘들 때는 말을 걸고 격려하면서 열심히 달리는 선수들이 너무 멋있게 보였습니다. 마라톤이 끝난 후에도 같이 사진을 찍거나 악수를 하는 사람들의 모습을 보고 언어는 통하지 않더라도 마음은 통할 수 있다 것을 알게 되었습니다.

또한, 저는 이날 매점에서 접객을 담당했는데 자신의 한국어 실력이 많이 부족하다는 것을 알게 되었고 크게 낙심했습니다. 그 때 어떤 한국인 아저씨가 음식을 사러오셨습니다. 그 아저씨가 돌아가기 전에 저를 보고 "한국어 공부 힘내라." 라고 격려해 주셨습니다. 저는 그 때 본 아저씨의 따뜻한 미소를 지금도 기억하고 있습니다. 저는 원래 실패를 두려워하고 소극적인 편이었지만, 앞으로는 적극적으로 행동을 하겠다고 결심했습니다.

그 이후 어학 연수와 홈스테이를 경험할 때에도 교류에 제일 중요한 것은 마음이라고 생각하며 참가했습니다. 그 때 저는 일상회화를 하는것도 어려웠고 처음하는 교류에 긴장하고 있었습니다. 그래도 제가 한국말을 하려고 노력하면 상대도 열심히 듣고 이해하려고 해 주었습니다. 그 때 저는 기뻤고 마음이 따뜻해졌습니다.

최근까지도 '반일' 이나 '혐한' 이라는 말이 이슈가 되고 있고, 양국 간 서로 좋게 생각하지 않는 사람들도 많습니다. 그러나 교류를 통해 상대방의 나라에 대해서 알게 되면 편견이 사라질 수도 있고 상대와 상대방의 나라에 흥미가 생길 수도 있습니다. 저 역시 예전에는 한국 아이돌을 좋아해서 한국 대중 문화의 극히 일부 밖에 몰랐지만 지금은 한국 문화나 역사에 대해 더 많이 알게 되었고 교류를 통해 많은 사람을 만났습니다. 이러한 지식은 저를 키워 왔고 앞으로도 쓸 데 없는 지식이 되지 않을 것입니다. 비록 지금은 양국의 상황이 좋지 않지만 다시 관계를 회복하기 위해 노력할 때 이러한 지식과 그 동안 교류를 통해 배워 온 서로 존중하는 마음을 필요로 할 것이기 때문입니다.

佳作

내가 생각하는 양국의 미래

大下莉奈〔長崎県立対馬高等学校〕

제가 고등학교를 졸업할 때 쯤. 대학교를 졸업하고 취직 할 때 쯤. 그리고도 먼 훗날. 여러분은 일본과 한국의 관계가 어떻게 되어 있을지 상상해 본 적이 있습니까?

일본 하고 한국. 매우 가까운 이웃 나라. 아득한 옛날부터 교류 관계가 있었다고 전해지는 나라. 이러한 말을 들으면 매우 친근한 관계인 것 같습니다. 실제로 서로의 문화를 접하고 적극적으로 교류에 참가하며 좋은 관계성을 쌓아가고자 하는 분들이 있습니다. 하지만 한편으로 서로의 나라에 좋지 않은 이미지를 가지고 있는 사람이 있는 것도 사실입니다. 최근 일한 관계가 좋지 않은데, 현재와 같이 관계가 악화된 이유에는 오늘에 이르기까지 오랜 역사 속에서 일어난 수 없이 많은 문제가 관련되어 있다고 생각합니다.

그런 일한 관계 속에서 제가 한국에 흥미를 가진 계기는 중학교 2 학년 때 친구가 추천해 준 K-POP 그룹 때문입니다. 훌륭한 가창력과 칼군무. 높은 레벨에 놀라 한눈에 반했습니다. 그렇게 K-POP 덕분에 한국에 흥미를 가지고 한국어와 한국 문화를 배우기 시작했습니다.

한국에 흥미를 가지면서 저는 자연스럽게 일한 관련 뉴스를 많이 보게 되었습니다. 그 때 제가 눈치 챈 것이 하나 있습니다. 그것은 바로 일본에서 방송하고 있는 일한 관계의 뉴스는 모두 일본을 좋은 이미지로 방송하는 점이었습니다. 그것을 깨달았을 때 저는 이 점이 일한 관계가 나빠지는 원인의 하나라고 생각했습니다. 일본은 최대한 좋은 부분을 보여주는 반면, 한국의 나쁜 점만 방송하고 있는 뉴스. 그 뉴스를 보고 한국에 나쁜 이미지를 가지게 되는 일본인. 저는 그것이 너무 답답했습니다. 그리고 저는 '이 답답한 일한 관계가 지금보다 개선될 때, 그 원인에 조금이라도 내가 관여하고 싶다.' 라는 생각을 하게 되었습니다.

한국어와 한국 문화를 배우고 있는 지금, 저는 꿈이 있습니다. 그것은 '일본과 한국을 잇는 번역가'가 되는 것입니다. 저는 두 나라의 문화를 각각의 나라의 사람들에게 전하고 일본과 한국의 존재를 더욱 가깝게 느끼게 하는 번역가가 될 것입니다. 이를 통해 일본과 한국 양국의 사람들이 서로를 지금보다 더욱 존중할 수 있다면 좋겠습니다.

佳作

내가 한국을 느끼는 순간

本田萌香〔神奈川県立横浜国際高等学校〕

나는 한국어를 좋아한다.

제가 한국어에 관심을 갖기 시작한 것은 중학교 2 학년 때 친구가 케이팝을 권유해 준 것이 계기입니다. 처음에는 무심코 음악을 듣고 있었지만 점차 가사의 의미를 조사 할 수 있게 되어 그 매력에 반해 갔습니다.

제가 한국어를 좋아하는 이유는 많은데 예를 들면 동그라미나 사각형이 결합하여 하나의 문자가 완성되는 것이 너무 신기하고 재미있었습니다. 그 밖에도 한자어로 이루어진 단어는 일본어와 발음이 비슷하기 때문에 친근감을 느끼는 등 일본인으로서 생각하게 하는 것도 있습니다.

그렇지만 가장 큰 이유는 한국어에서 느끼는 한국입니다.

예를 들어 한국어로 잘 "우리" 라는 단어가 사용됩니다. 자기의 집을 말할 때도 "우리집" 부모도 "우리아빠 우리엄마" 일본에서는 "나의" 라는 것을 "우리" 라고 표현한다. 이 표현에 한국인이 주위 사람을 생각 하거나 동료를 소중히 여기는 국민성을 느낍니다.

나는 한국인에 대해 굉장히 부드러운 이미지를 가지고 있습니다. 실제로 고등학교 1 학년 때 학교의 자매 학교 교류에서 한국에 갔지만, 그 때 한국 학생이 나에게 도움을 주거나 역에 있던 할머니의 짐을 운반을 도와주는 것이 아주 인상적이었습니다.

이 외에도 한국어를 공부하고 한국만의 가치관을 많이 느낄 수 많이 있습니다. 처음에는 공부를 싫어하는 내가 왜 한국어를 공부하고 있는지, 왜 이렇게 재미 있는지 모르겠습니다. 근데 공부를 계속하다 보면 한국이라는 나라를 한국어에서 느낄 수 있는 것이 재미있다고 깨달았습니다.

그리고 나는 미래 내가 좋아하는 한국어를 살린 일을 하고 싶다고 생각하고 있습니다. 한국어의 매력을 많은 사람에게 전하고 싶고 반대로 일본의 좋은 점을 직접 한국에 전하고 싶다고 생각했습니다. 하고 싶은 것이 많아서 나의 한국어의 미래가 지금부터 기대됩니다.

한국어에는 신기한 힘이 있습니다. 이런 멋진 매력 넘치는 한국을 앞으로도 공부를 열심히 계속하고 싶습니다.

佳作

꽃길 속에 피어난 한일 교류

池田萌々〔茗溪学園高等学校〕

'꽃길만 걷자' – 이 말은 내가 알고 있는 한국말 중에서 가장 좋아하는 말입니다. 지금까지 고생 했던 사람들에게 그 고생한 것에 대해 공감해 주고 앞으로도 좋은 일만 있기를 바라는 마음을 담고 있는 이 말을 들으면 엉겁결에 눈물이 납니다. 저는 한일 교류도 이 것과 똑 같다고 생각합니다. 서로 다른 상대방의 문화와 생각을 공유하고 이해 주는 것이 한일 교류의 출발점 이라고 생각하고 이런 관점에서 저는 제가 어떻게 한국어와 한국 문화에 관심을 갖게 되었는지와, 그리고 이런 관심들이 어떻게 한일 문화 교류와 연결되는지에 대해 말하고 싶습니다.

나는 어릴 때부터 가족과 함께 한국의 드라마를 보고 자라났습니다. 중학생이 되면서부터 드라마의 주제곡을 부르고 싶다는 마음에서 독학으로 한국어를 공부하기 시작했습니다. 우선 한글을 읽고 쓰는 것을 배우는 것부터 시작해서 드라마를 보고 대사를 따라 하고 있었습니다. 그러면서 저의 관심은 점차 음악과 한국 음식으로 까지 늘어나게 되었고, 지금은 좋아하는 케이팝 그룹의 신곡이 나오면 일본어 번역을 보기 전에 스스로 한번 번역 해 보거나 자막 없이 한국 드라마를 보고 있습니다. 그렇게 한국어를 공부하면서 일본어와 다른 표현 방법을 깨닫고 그런 다른 표현과 생각에 대해 더 알고 싶어졌습니다.

제가 생각하는 한일 교류는 서로에 대해 관심을 갖고 이해하고 공감해 주는 것입니다. "한국인 이니까", "일본인 이니까". 나는 이 말을 좋아하지 않습니다. 지금 당신의 옆에 있는 사람은 당신과 똑같은 생각을 가지고 있습니까? 비록 가족이라도 그런 건 없습니다. 각각 다른 생각을 가지고 있는데, 한국인, 일본인, 그런 큰 통합으로 구분하는 것은 슬픈 것이라고 생각합니다. 우리가 살고 있는 지금은 인터넷 사회라서 정보의 진위를 판단하는 것은 어렵고, 그 정보에 놀아난 지도 모르겠습니다. 그러나 그런 인터넷도 이용할 수 있다면 다른 나라에 있는 사람과도 쉽게 생각을 공유 할 수 있습니다. 그렇게 서로의 문화와 역사, 생각을 공유하고 이해하고 존중 할 수 있다면 한일 교류를 더 넓힐 수 있다고 생각합니다. 일본에서는 지금 케이팝을 비롯해서 한국의 패션과 음식이 유행하고 많은 젊은 사람들이 한국에 대해 좋은 인상을 가지고 있습니다. 비록 작지만 그런 작은일부터 우리가 솔선해서 시작한 한일 교류가 언젠가 한일간의 가교 역할을 할 수 있도록 바랍니다.

最優秀賞

내가 생각하는 양국의 미래

斉智司〔東京都〕

“나는 미래를 바라보고 있어”

한국어 자원봉사를 왜 시작하려고 하는지 묻는 말에 대한 아내의 대답이다.

우린 일본의 평범한 가정이다. 이곳에서 아내와 나는 한 달에 1 번 한국어와 한국문화를 가르치고 있다. 이번 달에는 자녀가 4 명, 어머니가 3 명 참가하였다. 이 활동은 반년 전부터 시작하였는데 아내는 행사 전날 밤이면 항상 한글책을 읽어보거나 한글 동요를 목소리에 강약을 붙여 연습한다. 나는 아내의 영향으로 한국어 공부를 본격적으로 시작했고 두 살배기 딸도 한국어로 간단한 인사까지 할 수 있게 되었다. 아마 10 년 후쯤에는 딸이 나보다 한국어를 더 잘하게 될 것 같다.

“어른들은 매스컴을 통해 모든 것을 판단해. 한국엔 좋은 사람이 정말 많아. 내가 십 년간 살 때에도 나에게 호의를 베풀어 준 사람도 많았고. 가까운 나라일수록 서로 잘 지내야 하는데 어른들은 본질을 외부의 영향으로 인해 잃어버리곤 해.” 이처럼 아내는 한일관계가 험악하다는 소식이 나올 때마다 걱정을 거듭했다. 그리고 아내는 생각 끝에 “할 수 있는 일부터 시작하자” 고 이 풀뿌리 자원봉사 활동을 고안했다.

“아이들은 순수하고 본질을 스스로 판단하는 눈이 있어. 언젠가 이 자녀들이 성장하여 한국과 일본을 편견이나 선입견 없이 이해하고 인정하는 관계가 된다면 좋겠어. 나는 그 미래를 믿고 활동하기로 했어.” 아내는 이렇게 말하고 활동을 계속하고 있다.

“♪♪♪”

경쾌한 리듬에 맞춰 눈앞에서 아이들이 신나게 춤을 추기 시작한다. 아내는 아이들의 손을 잡고 앞으로 갔다 뒤로 갔다 매우 바쁘게 움직인다. 얼마 있다가 내가 바통을 넘겨받아 더듬거리는 한국말로 그림책을 읽거나 윷놀이나 팽이놀이를 하면서 아이들의 관심을 유도한다. 그 사이 아내는 어머니들에게 한국어를 가르친다. 때때로 한국인 어머니를 게스트로 초대해 왁자지껄 다 함께 차를 마신다. 이런 따뜻한 광경을 보고 있자면 솔직히 국경은 누군가가 만든 것으로 사람들의 마음속에는 없는 것으로 보인다. 왜냐하면 우리 주위의 일본인 한국인은 서로를 존중하고 이해하고 있다고 생각하기 때문이다.

이제는 한일 간의 왕래가 쉬워져 다양한 교류가 증가하고 있다고 한다. 나는 우리와 같은 민간차원의 교류가 지속되는 한 양국의 미래는 밝을 것이라고 확신한다. 그리고 우리의 활동이 결실을 맺어 마음속에 국경이 없는 아이들이 늘어난다면 더 밝은 미래가 한국과 일본을 맞이해 줄 것이라 믿어 마지않는다.

優秀賞

나의 확신

矢田智子〔高知県〕

지난 6 월 내가 일하는 초등학교에서 열린 평화집회에서 학생들과 같이 한 할머니의 이야기를 들었다.

1945 년 8 월 전쟁이 끝났을 때, 9 살이셨던 할머니는 한반도에 살고 계셨다. 할머니의 아버지는 러시아로 끌려가셨기 때문에 어머니는 3 명의 자식을 데리고 일본에 돌아가기로 했다고 한다. 한반도를 걸어서 이동해 부산에서 배를 탈 계획이었다. 어린 아이들이 부산까지 걷는 일은 큰 고통이었지만, 발바닥이 매끈매끈해질 때까지 3 개월을 걸었다고 했다. 형언 할 수 없을 정도로 힘들었으며 늘 배고팠기 때문에 길에 떨어진 무잎 한 장을 가지고 동생과 서로 다투어 먹은 적까지 있었다고 할머니는 말씀하셨다. 그런 어려운 시절의 이야기를 하시면서도 할머니의 얼굴이 빛났던 한 순간이 있었다. 시골길을 걷고 있을 때 였다. 멀리 보이는 조선의 아주머니께서 할머니 가족을 발견하자 머위 잎에 새하얀밥을 얹은 것을 길가에 놓고 가셨다고 한다. 할머니께서는 이야기를 듣고 있는 우리들에게 ‘그 밥은 우리더러 먹으라는 의미였겠죠?’라고 물었고 우리는 일제히 고개를 끄덕였다. 할머니의 미소로 나는 그 새해얀 밥의 맛을 느꼈다. 종전 직후의 상황에서도 그 조선 아주머니께서는 일본인에게 배려를 베풀어 주셨다. 이야기를 들으며 나도 아주머니께 감사한 마음이 들었다.

나는 한국어 공부를 시작하고 한국인과 가깝게 지내면서 국가간의 관계를 만드는 것은 정치인이나 매스미디어가 아닌 시민이라고 생각하게 됐다. 할머니 이야기를 들으며 또 한번 확신했다. 우리 시민들이 좋은 한일관계를 만들 수 있다고. 나에게는 이미 한국은 단지 옆나라가 아니다. 소중한 사람들이 많이 사는 친척집 같은 존재다.

나는 한국의 시민의 힘을 존경하고 동경한다. 광주사건 등에 관한 영화를 보고 감동했기 때문이다. 시민의 자유를 지키기 위해 단결하는 사람들을 보고 눈물을 멈출 수 가없었다. 나도 신념에 따라 행동하는 힘을 가지고 싶다. 정치를 움직이는 시민이 되고 싶다.

나는 한국으로부터 많이 배웠다. 그리고 한국인이 일본의 좋은 점을 찾아줄 때면 기쁘다. 가까운 장래 한국과 일본이 진실로 가장 친한 친구이자 선의의 라이벌이 되길 바란다. 평창올림픽의 이상화 선수와 고다이라나오 선수처럼. 양국의 평화를 위해 내가 조금이라도 도움이 된다면 그 이상의 기쁨이 있을까. 작은 힘이라도 모이면 큰 힘이 될 것이다. 나도 아주머니와 할머니처럼 평화를 위한 작은 씨앗을 뿌리고 싶다.

優秀賞

나는 알게 되었다

大場千尋〔新潟大学〕

에피소드 1

3 년 전 여름, 난생처음으로 친구들과 한국 여행을 갔다. 이대 앞 거리를 구경하면서 구두집으로 들어갔다. 그 구두 집 아저씨는 우리가 일본인인 줄 알자마자,

“일본인이에요? 나는 일본을 많이 좋아해요. 어디에서 왔어요?”

라고 일본어로 물어보셨다.

“아… 모르실 수도 있는데요, 저희는 니가타에서 왔어요”

“어, 니가타 알아요. 거기 쌀이 유명하잖아요. 맛있어서 내가 니가타 쌀 맨날 주문해 먹거든요.”

정말 깜짝 놀랐다. 도쿄나 오사카 같은 큰 도시도 아닌 니가타를 아시다니. 그것도 쌀이 유명한 것까지. 그리고, 일본을 좋아하신다니.

에피소드 2

작년 여름, 한국 유학을 하러 가서 처음으로 전주에 여행을 갔다. 유명한 전주 한옥마을에서 한복을 입고 주변을 돌아다녔다. 어떤 아주머니들이,

“어머 ~! 예뻐라 ~! 같이 사진 찍어줄래?”

라고 하셨다. 내가 일본인인 걸 아셨는지,

“멀리서 잘 왔어 ~. 마음껏 즐기다 가라 ~.”

라고 하셨다.

마음이 왠지 따뜻해졌다. 아니, 너무 뜨거워졌다.

에피소드 3

요즘 처음으로 한국에 펜팔 친구가 생겼다. 그 친구는 어렸을 때, 일본을 싫어했다고 해서 왜 그랬는지 물어봤더니,

“그냥. 다들 그렇게 말해서. 근데 나이 먹어서 일본이란 나라를 알게 되다 보니깐, 사실 그렇게까지 싫지는 않더라고. 음식도 맛있고 길거리도 예쁘고 여행 갔을 땐 착한 일본 사람들이 많았고. 그리고 너도 내 친구 해주고.”

나는 마음이 뭉클거렸다. 나는 이 말을 평생 못 잊을 것 같다.

나는 내가 그 사실을 자기 눈으로 볼 때까지, 자기 귀로 들을 때까지 몰랐다. 맨날 미디어에서 보던 정치 이야기, 위안부 문제, 광화문 앞에서 한국 사람들이 하는 데모, 이런 것을 볼 때마다,

“한국 사람들은 다 일본을 싫어하나 봐….”

라는 생각을 하곤 했다. 하지만 실제로 한국이란 나라를 가 보니, 내가 보던 것이랑 경험한 것들이 너무나 달랐다.

내가 아는 한국은 나를 한 인간으로서 따뜻하게 반겨주는, 그러한 한국 사람들이 사는 나라다. 물론, 다 그런 사람들만이 있는 것이 아니지만 백문이 불여일견이란 말이 있듯이 일본에서 살면서 알 수 없었던 것들이 경험으로 알 수 있게 되었다.

사람의 마음을 바꿀 수 있는 것은 사람의 마음밖에 없다. 앞으로도 두 나라가 서로를 다 이해하기는 어려울 것이다. 하지만, 서로를 알려고, 이해하려고 노력하는 사람들이 있는 한, 그리고 그런 마음이 있는 한, 우리는 언젠가 하나가 되지 않을까 싶다.

佳作

내가 생각하는 한일교류

柴田由香子〔青森県〕

일반적으로는 국제교류라면 국가간의 이벤트를 개최하고 참가하는 정도로 생각하겠습니다.
하지만 저는 이런 특별한 활동 외에 평범한 일상 속에도 국제교류는 많다고 생각합니다.

저는 한국 사람과 결혼을 해서 한국에서 아이를 낳고 기르면서 8 년동안 살았습니다.
그 때의 경험에서 얻은 나의 한일교류에 대해 이야기하고 싶습니다.

어느날 길에서 지인의 아들에게 인사를 받고 조금 놀란 적이 있었습니다.

저는 어렸을 때 부끄럼이 많아서 이웃 아이들에게 인사를 한 적이 별로 없었습니다. 고개를 숙이고 지나가는 정도였습니다.
그 때 그 아이가 너무나 당연하게 인사를 하고 지나가는 모습에 약간 충격을 받고 부럽기도 했습니다.
아직 한국말을 잘 못해서 자신이 없던 나는 누군가와 이야기를 하고 싶은 마음에, 그렇다! 그 아이처럼 나도 우선 인사부터 시작해 보자고 마음 먹었습니다.

인사를 해보니까 차갑던 이웃들도 반갑게 말을 건네주고 결코 능숙하지 않은 저의 한국어를 천천히 잘 들어 주기도 했습니다.

어느정도 수다를 떨 수 있을 만큼 자연스러워지자 이번에는 저에 대해서 묻기도 했고 저도 서툰 한국말로 열심히 대답을 하면 직접 본인과 얘기할 수 있어서 더 좋았다고도 했습니다.

이처럼 생활하면서 나누는 작은 대화 속에서 서로를 알 수 있다는 것이 참 소중하게 느껴졌습니다. 이것이 제가 한일 교류에 대해 생각하게 된 계기였습니다.

그리고 몇 년이 지났습니다. 평소처럼 이웃들과 수다를 떨고 있는데 누군가가 “이제 한국사람 다 됐네!” 라고 말했습니다.

처음에는 무슨 뜻일까? 하고 그 진의를 의심했습니다. 왜냐하면 오랫동안 주위 사람에게서 벽을 느껴왔기 때문입니다. “이 사람들은 그저 나를 근처에 사는 일본사람 정도로 밖에 생각하지 않을거야 “라고 솔직히 한국사람은 대체로 모르는 사람에게는 친절하기 보다는 무뚝뚝해서 냉혹하다는 느낌이 더 많았거든요.

그것이 언제부턴가 반찬을 나누어 먹고 나를 걱정해서 꾸짖기도 했습니다. 인사 하나로부터 시작된 계기가 어느새 조금씩 제가 이웃들에게 받아들여지고 있었던 것입니다 그 사실을 이 한마디가 처음으로 알게 해 준 것입니다. 실제로 벽을 만들고 있었던 것은 나였구나! 이제 나도 이들의 아는 사람 속에 들어간다는 뜻이구나! 라고 생각하니 어느새 의심은 사라지고 오히려 이 한마디에 큰 기쁨과 감동을 받았습니다.

이처럼 국제교류는 특별한 것이 아니고 생활 속 어디에나 있었습니다.
이 경험을 통해서 얻은 기쁨과 감동을 우선 내 아이에게 전해 주는 것으로 한일 교류에로 이어져 오래도록 좋은 관계가 지속되기를 바랍니다.

佳作

내가 생각하는 한일교류

日野萌〔上智大学〕

“그리고 언니, 한국을 좋아해줘서 정말로 고마워요.” 한국인 후배에게서 고등학교 졸업식때 받았던 편지에는 이렇게 쓰여 있었다.

내 인생은 보통 일본사람들과 조금씩 다르다. 유치원때부터 국제학교에 다녀서 한국인 친구들도 많이 있다. 생활 속에 한국은 언제든지 있었다. 그렇지만, 처음에 한국에 관심이 생겼던건 고등학교에 입학한 후였다. 나의 제일 친한 친구는 일본어를 너무 잘 해서 그 친구와 같이 놀 때 영어와 일본어로 이야기를 했다. 하지만 어느 날 갑자기 영어와 일본어만 쓰는 것은 그 친구에게 평등하지 않다고 생각이 들어서 그날부터 한국어를 배우기 시작했다. 한국어는 글자가 다르니까 문법도 엄청 다를 줄 알았는데, 시작하자마자 일본어와 문법이나 단어가 비슷한 것을 알고 왜 더 일찍 공부를 시작하지 않았는지 후회했다. 이렇게 공부를 시작하고 2 년이 지난 지금, 나는 언어를 통해서 깨달은 새로운 한국문화가 많다.

일본과 한국의 거리는 가까우면서도 마음은 아직 멀다. 그것을 내 후배에게서 받았던 편지를 읽고 나는 느꼈다. 왜 우리는 친구인데 한국인이라는 이유만으로 일본인에게 거리를 느껴야 하는지, 그리고 왜 감사의 말을 전하는지. 이런 것들을 생각했을 때 조금 슬펐다. 내가 생각한 한일 교류는 이런 말을 하지 않아도 서로를 통해서 문화를 배우고 민간 차원에서 친해지는 것이다. 그렇게 되면 언젠가 내 친구처럼 “한국을 좋아해줘서 고마워요” 라는 말을 안 해도 서로 정말 의미로 친한 친구가 될 수 있고 일본과 한국이란 나라가 가까워 질것이라고 기대한다. 이렇게 조금씩 서로를 이해할 수 있으면, 자신이 얼마나 그 나라에 대해 몰랐다는 것을 깨닫게 된다. 우선 한국을 대중문화나 자신이 관심 있는 분야에서 배우기 시작해, “알고싶은 마음” 을 가지면 첫 번째 단계를 밟을 수 있다. 이 “알고 싶은 마음” 은 중요하고 그것이야말로 내가 생각한 한일교류다.

佳作

내가 생각하는 한일교류

保井健〔東京都〕

나는 연극 배우이다! …배우… 그렇게 말했지만 소극장 베우인데 유명하지 않다. 이전에 우연히 도쿄에 있는 소극장에서 일본과 한국의 연극 교류가 있다는 것을 알았다. 그것은 2 년에 한 번 열리고 있었다. KBS 월드로 한류 드라마나 K-POP 에 빠진 나는 연극에도 기대가 많았다. 그래서 두 번 보러 갔는데 한 번은 전쟁 이야기, 또 한 번은 집단 자살 이야기였다. 솔직히 별로 재미없었다. 한국 소극단은 공연을 자막으로도 보여주었는데 일본 소극단의 공연은 한국어 자막이 없었다. 게다가 한국을 소재로 하지도 않았다. 나는 굉장히 섭섭했다. 도대체 이것을 한일교류라고 볼 수 있는 것일까?

옛날에 내가 소속되어 있었던 소극단이 중국에서 공연을 한 적이 있었다. 물론, 일본어로 공연할 예정이었으므로 미리 중국어로 변역한 대본이 객석으로 배포되었다. 무대 배우로서 무대에 선 내가 객석을 보니 손님들은 대본을 읽고 있었다. 이것을 연극이라고 볼 수 있을까? 지금까지 나도 해외 공연을 많이 봐 왔는데 여전히 배우의 대사를 자막으로 보여주는 공연이었다. 배우가 대사하는 것을 객석에서 보는 것이 연극인데 대사를 읽는 것은 연극이 아닌 것 같았다. 음악이나 댄스처럼 말이 필요하지 않은 공연은 어떤 나라에 가도 공연할 수 있지만 말이 필요한 연극은 해외 공연으로 맞지 않는 것일까?

나는 한국어를 공부한 지 5 년 정도 되었다. 수업에서 선생님께서 항상 한국어로 말씀하신다. 그런데 나는 이해하지 못하는 것이 많다. 그러면 선생님께서는 일본어로도 말씀해 주신다. 2 개 국어 수업이디. 어? 이것을 연극으로 이용할 수 있지 않을까? 예를 들면 일본에서 공연할 경우에는 먼저 한국어로 대사를 하고 나서 그 후에 일본어로 말하는 것이다. 또한 한국에서는 그 반대로 하는 것이다. 이 방법으로 2 개 국어 연극 공연을 할 수 있을지도 모른다. 옛날에 본 영화에 내가 좋아하는 대사가 있다. 그것은 "하룻밤의 ＧＩＧ (라이브) 가 세계를 바꾼다." 이다! 그래! 2 개 국어 공연이다! 이 방법의 작품이 세계를 바꿀지도 모른다. 한국어를 더 공부해서 아직 아무도 해본 적이 없는 2 개 국어 연극을 나는 만들고 싶다! 이것이 내가 생각하는 한일 교류이다!

佳作

잘 지내고 있니 ?

飯澤みくに〔北海道〕

“미쿠니 , 잘 지내고 있니 ?”

한국에 있는 언니한테서 이런 메시지가 종종 온다 . 국적과 언어는 달라도 언니는 항상 나를 염려해준다 . 우리의 대화는 매번 이 짧은 안부에서 시작되어 최근에 있었던 일이나 힘들었던 일 , 그리고 기뻤던 일을 나누는 것으로 이어진다 . 예전부터 알고 지낸 친구가 일본을 좋아하는 언니를 소개해 줬는데 그때부터 언니와 나는 한국어로 메시지를 주고받는 친구가 되었다 .

어느 날 언니에게서 “미쿠니 , 괜찮아 ?” 라는 메시지가 왔다 . 그날은 2018 년 9 월 6 일 , 내가 살고 있는 홋카이도에서 큰 지진이 발생한 날이었다 . 지금까지 경험해 본 적 없는 큰 지진이었고 전기까지 끊어져 버려 아주 불안한 마음으로 지내고 있을 무렵이었다 . 그 때 언니는 한국에서 뉴스를 보자마자 메시지를 준 것이었다 . “미쿠니 , 삿포로 지진 났던데 피해 없었어 ?” 라며 나를 걱정해주는 언니의 마음이 너무 고마웠고 많은 위로가 되었다 . 그리고 언니는 “홋카이도를 위해 기도할게 .” 라는 말도 잊지 않고 남겨 주었다 .

우리는 지금까지 메시지만 주고받을 뿐 아직까지 만난 적이 없다 . 만약에 실제로 만난다면 어떨까 하고 우리의 모습을 상상해 본다 . 마치 오랜만에 만난 친자매처럼 밤새도록 도란도란 이야기 꽃을 피우지 않을까 ?

그동안 한국에 관심도 없었고 특별히 좋아하지도 않았던 나는 어느 사이엔가 한국을 사랑하게 되었다 . 이렇게 생각이 바뀐 계기는 한국 문화와 한국 사람을 직접 접할 수 있었기 때문이라고 생각한다 . 그 덕분에 한국 문화가 더 알고 싶어졌고 , 한국 사람들의 따뜻한 정을 느끼게 되어서 한국을 사랑하게 된 것 같다 .

한일관계가 냉랭해지고 있는 요즘 , 우리는 무엇을 할 수 있을까 ? 나는 양국 관계가 예전 같지 않은 상황인 만큼 민간 교류가 더 활발해졌으면 하는 바람이다 . 그리고 서로를 깊이 이해하기 위해 서로의 문화를 접하는 것도 관계개선에 도움이 된다고 본다 . 그러면 상대방의 좋은 점을 발견하게 되고 상대방을 인정하고 배려할 수 있기 때문이다 . 사람과 사람의 관계처럼 나라와 나라도 서로를 이해하고 협력해서 밝은 미래를 함께 만들어 갔으면 좋겠다 .

서로를 염려하는 마법의 말 , “잘 지내고 있니 ?” . 이 짧은 말 한 마디에서 이야기 꽃이 피어나는 것처럼 한국과 일본도 우정의 꽃을 피우고 새로운 한일관계의 문이 열리기를 바라며 오늘도 나는 언니에게 메시지를 보낸다 .

“언니 , 잘 지내고 있어요 ?”

最優秀賞

DMZ 여행

吉田紋子〔広島県〕

2018 년 2 월에 고성에 갔다. 한국에 관심이 많아서 여러 번 한국에 갔지만 DMZ 에는 간 적이 없었다. 그 지역은 위험하고 분위기가 어두울 것이라고 생각했기 때문이다. 그런데 버스가 고성으로 다가갔을 때 나는 놀랐다. 그 지역의 바다가 그렇게 아름다울 줄 몰랐다. 나는 버스 창문 너머로 그 아름다운 바다를 한동안 바라봤다. 그 예쁜 바다, 그리고 그 위에 펼쳐져 있는 파란 하늘이 두 나라로 나뉘어 있는 것에 대해서 위화감을 느꼈다. 그 바다와 하늘, 그리고 땅을 나눈 자는 사람들이다. 백 년 후에는 아무도 이 땅에 남아 있지 않을 사람들. 바다의 아름다움에 비례해 내 마음이 무거워졌다.

그 무거운 마음으로 고성 통일전망대에 올라갔다. 전망실에서 커다란 창문 밖에 펼쳐져 있는 바다와 하늘의 아름다움이 나를 압도했다. 그 아름다운 경치를 카메라로 찍고 싶었다. 그 지역에 대한 설명을 들은 뒤에 테라스에서 사진을 찍었다. 나는 아름다운 곳에서 사진을 찍을 때마다 하는 것처럼 만세 포즈를 취했다.

버스가 전망대를 떠났을 때 40 대 후반인 여성 가이드가 그곳을 가볍게 생각하지 말라고 했다. 그때 생각났다. 전망대에 도착하기 전에 가이드님이 351 고지전에 대해서 이야기하시면서 눈물을 흘리셨다는 것을. 전투가 너무 심해서 땅이 깎여서 낮아질 정도였고 한 아들 어머니로서 아주 애절하다고 말한 것을. 전망대에서 만세 포즈를 취했던 나는 생각이 짧았다. 그리고 내 고향 히로시마가 떠올랐다. 나는 관광객들이 원폭 돔 앞에서 브이하면서 사진을 찍는 모습을 보기 싫었다. 하지만 나는 전망대에서 똑같은 행동을 한 것이다. 반성하면서 돔 앞에서 사진을 찍는 사람들 마음을 조금 이해한 것 같기도 했다. 나는 겨우 깨달았다. 그 지역에서 태어나서 자란 사람과 관광객은 똑같이 느끼지 못한다는 것을.

DMZ 박물관에서는 고성의 “평화” 는 “통일” 이라는 단어와 깊게 연결돼 있는 것을 느꼈다. 히로시마에서는 “평화” 라고 말하면 “원폭” 을 생각한다. DMZ 박물관에서 히로시마에는 히로시마의 평화가 있고 고성에는 고성의 평화가 있다는 것, 아마 지역마다 그 지역의 “평화” 가 있다는 것을 처음으로 깨달았다.

DMZ 에 직접 가 보지 않으면 그렇게 느끼지 못했을 것이다. 그 여행 덕분에 그 지역에 직접 가 봐야 느끼고 깨닫는 것이 있다는 사실을 실감했다. 또한 그 지역에서 태어나서 자란 사람처럼 느끼지 못해도 타지에서 온 사람으로서 뭔가를 느끼고 생각하는 것도 중요하다는 것을 깨달았다.

優秀賞

추억의 한국 프로야구

佐藤康予〔東京都〕

나는 해외여행을 좋아한다. 그 이유는, 해외여행을 떠나면 예상하지 못한 일로 당황스러운 상황에 마주치기 마련인데, 그 때 어떻게 대처하느냐에 따라 나의 새로운 모습을 발견하기도 하기 때문이다.

5 월 연휴 때 야구광인 남편을 위해 부산에 가기로 했다. 여행 첫째 날 밤에 남편은 한국 프로야구 중계를 편한 자세로 즐기고 있었다. 옆에 있던 내가 내일 야구를 보러 가겠냐고 물어보았더니 가도 괜찮고 안 가도 괜찮다는 애매한 대답이 돌아왔다. 그래서 일단 호텔 직원에게 내일 야구 경기의 티켓이 있는지 알아봐 달라고 부탁했다. 잠시 후에 티켓이 많이 남아 있다는 연락이 와서 가기로 했다.

이튿날 저녁에 롯데자이언츠의 홈구장인 사직구장 매표소에서 홈팀 쪽 내야석 티켓을 샀다. 이미 시합이 시작되어서 관람석은 응원하는 관중들로 가득했다. 북적대는 가운데 겨우 좌석을 찾아냈는데, 타석쪽을 바라보니 응원을 리드하는 치어리더 두 명과 응원단장이 멀리 보였다. 롯데자이언츠의 공격 차례가 되자 관중들이 그들의 구호나 몸짓과 손짓을 따라 하면서 다 같이 열띤 응원전을 벌이고 있었다. 나도 어느새 몸이 저절로 들썩거려지며 빠져들어갔다.

한참 야구를 재미있게 보고 있는데 계단식으로 배치되어 있는 관람석과 조금 떨어진 곳에서 방송 카메라를 어깨에 짊어진 사람이 우리를 비추려 하는 것 같았다. 그 때 공격과 수비가 바뀌면서 큰 전광판에 '키스타임' 이라는 글씨가 나타났다. 얼굴이 클로즈업된 커플에게 대중 앞에서 키스시키는 이벤트가 시작되었다. 키스할 때까지 커플의 얼굴을 계속 비추고 있었는데, 베스트 커플로 뽑힌 커플에게는 항공권을 선물로 준다는 것 때문인지 머뭇거리면서도 키스를 꺼리는 커플은 하나도 없었다.

이 이벤트가 끝나자마자 방송 카메라를 어깨에 짊어진 사람이 눈 앞에서 감쪽같이 사라져 버렸다. 결국 나의 지레짐작이었지만 만약에 우리 얼굴이 비추어졌다면 남편이 어떤 반응을 보일지 궁금했다. 옆에서 남편은 생맥주를 마시면서 타자가 통쾌한 안타를 칠 때마다 마치 자신이 쳐낸 것처럼 좋아하며 환호성을 질렀다. 내가 대중 앞에서 키스해야 할까 봐 헛된 망상에 사로잡혀 가슴이 두근거렸던 것을 남편은 꿈에도 모를 것이다.

흥겹고 다양한 응원 문화가 자리 잡고 있는 한국 프로야구! '남녀칠세부동석' 이라는 말이 있어서 일본보다 보수적인 나라인 줄 알았는데 그렇지 않았다. 다음에라도 짜릿한 키스의 기회를 잡기 위해 다시 한번 꼭 찾아가 보아야겠다. 나로서는 푸짐한 추억을 안겨준 부산여행이었다.

優秀賞

여행하는 딸

古味優子〔高知県〕

제가 한국어공부를 시작한 지 15 년이 되었습니다. 15 년 전, 중학생이었던 우리 딸은 학교간 교류로 처음으로 한국여행을 가게 되었고, 한국 여학생 집에서 이틀간 홈스테이를 하였습니다. 여학생의 가족은 따뜻하게 우리 딸을 맞아주셨고 덕분에 딸은 즐거운 추억을 많이 만들었습니다.

겨울이 되자 그 한국 여학생이 우리집에서 홈스테이를 하게 되었습니다. 저는 딸에게 따뜻하게 대해 준 것에 대한 감사의 마음을 한국어로 전하고 싶었습니다. 그렇게 저는 한국어 공부를 시작하게 되었습니다.

딸은 자주 한국이야기를 했습니다. 놀이공원에 갔던 일, 쇼핑을 했던 일, 한국 중학교에서 유카타를 입고 패션쇼를 했던 일. 그리고 그때 만난 한국의 학생들에게 자극도 많이 받았다고 했습니다. 공부를 싫어하는 딸이었지만 그때 장래목표가 생긴 것 같았습니다. 한국어공부도 이어가고 있었습니다. '고등학생이 되면 엄마랑 같이 한국에 여행가자' 고등학교 입시를 앞둔 딸에게 말하자, 딸은 기쁜 듯 고개를 끄덕였습니다. 그런데, 딸은 입시를 보는 일도, 저와 약속한 한국여행을 가는 일도 없이 갑자기, 정말 갑자기 하늘나라로 떠났습니다.

나중에 들으니, 딸이 하늘나라로 떠나던 그날 아침 등교길, 딸은 친구에게 이런 이야기를 했다고 합니다. '어젯밤에 정말 긴 꿈을 꿨어. 친구랑 같이 여행하는 꿈. 진짜 재밌었어.' 늘 한국에 다시 가고 싶다고 말하던 딸이 꾼 꿈의 여행지는 한국이지 않았을까 저는 생각했습니다. 딸이 이 세상을 떠난 뒤에도 저는 한국어공부를 그만두지 않았습니다. 한국어는 딸이 저에게 남겨준 선물, 유산 같은 것이라고 생각하니까요.

저는 가끔 생각합니다. 우리 딸은 지금도 한국에서 여행중인 것은 아닐까? 꿈의 도중에 있는 것은 아닐까. 밝고 친구가 많았던 딸은 지금 한국여행 중 만난 한국친구와 '우리나라들 서로 어떻게 하면 진실한 우정을 맺을 수 있을까' 하며 이야기 나누고 있을지도 모릅니다.

올해 가을 저는 한국여행을 갈 것입니다. 어쩌면 길을 걷다 딸을 만날 수 있을지도 모릅니다. 제가 '오랜만이야. 잘 지냈어?' 하고 물으면 딸은 웃으며 '네, 어머니 저는 잘 지내고 있어요.' 라고 대답할 것만 같습니다.

佳作

버스는 한국인의 정을 싣고

藤岡美帆〔東京都〕

나는 한국 여행을 좋아해서 지금까지 58 번 여러 도시를 방문했는데 그때마다 버스 타는 것을 좋아한다. 한국 버스에서 경험한 세 가지 에피소드를 소개하려고 한다.

〈이야기 1〉

지리산에서 돌아와 부산 시내버스로 중앙동까지 가는 길에 친구가 만원짜리 2 장을 요금 상자에 넣어버렸다.

운전기사 " 아이고 왜 지폐를 요금상자에 넣었어요 ?"

친구 " 거스름돈이 받을 수 없군요. 죄송합니다. 그럼 거스름돈은 괜찮습니다."

운전기사 "그래도 손님에게 거스름돈을 돌려줘야지. 다른 손님들이 현금을 낼지도 모르니까 조금 기다려 주세요."

하지만 대부분이 교통카드라 아무도 현금을 내지 않았다. 그러자 앞에 앉은 아저씨가 운전기사에게 말했다.

아저씨 "일본에서 온 아가씨한테 왜 거스름돈을 안 주는 거야 ?"

운전기사 "가지고 있는 돈이 5 만원짜리 밖에 없어서 줄 수 가 없어요."

아저씨 "그럼 내가 만 원짜리 5 장으로 바꿔줄게."

아저씨가 돈을 바꿔 준 덕분에 친구는 무사히 거스름돈을 받을 수 있었다.

〈이야기 2〉

대구에서 안산을 관광한 후에 시내버스를 타고 중심가로 향했다. 나는 깜빡하고 모자를 차 안에 두고 내렸다. 내리자마자 그 사실을 알아차렸지만 버스는 출발해버렸다. 귀찮기도 하고 비싸지 않은 모자라서 그냥 포기 하려고 했다. 그러자 막 출발한 버스가 갑자기 멈추더니 창문에서 내가 잃어 버린 모자가 날아왔다. 모자를 잃어버린 것을 알아차린 여자분이 창문에서 던져준 것이다.

〈이야기 3〉

설악산 등산에서 돌아가는 길에 강원도 · 오색온천에서 양양까지 시외 버스를 탔을 때의 일이다. 어떤 아주머니가 운전기사에게 말을 걸었다. "내리는 건 아닌데 조금 후에 서는 버스 정류장에서 뒷문을 좀 열어 주세요."

운전기사 "알겠습니다."

전기사는 아주머니가 요청한 버스 정류장에 정차하고 뒷문을 열었다. 그러자, 버스 정류장에 있던 다른 아주머니 한 분이 버스의 아주머니에게 급히 비닐 봉지에 든 짐을 건넸다. 소요 시간은 3 분도 걸리지 않았는데 아줌마가 받아든 봉지를 열자 차내는 송이버섯의 좋은 향기로 가득 찼다. 버스 운전기사는 아주머니에게 "송이버섯에서 좋은 향기가 나네요." 라고 웃으며 말을 걸었고 차내는 송이버섯 관련 이야기가 시작돼 훈훈한 분위기가 퍼졌다.

한국에서 자주 보는 운전기사와 손님의 대화는 한국인 만의 정을 느끼게 한다. 버스 안에서 펼쳐지는 인정 넘치는 드라마를 만나기 위해서 다음 한국 여행에서도 나는 버스를 탈 것이다.

佳作

나랑 친구와의 '한국어' 여행

中山由紀子〔北海道〕

작년 11 월에 한국어교실에서 알게 된 친구와 부산으로 여행갔다. 한국에 가 본 적은 몇 번이나 있었는데 친구와 같이 가는 건 처음이었다. 우리는 동갑이지만 나는 한국어를 배운 지 7 년이 됐고 친구는 아직 초보자였다. 열심히 공부하고 있는 친구를 위해 한국어를 많이 쓰기로 했다.

우선 내가 선배로서 한국인과 멋지게 이야기하는 모습을 친구에게 보여줘야 했다.

그래서 공항에 마중 나온 가이드에게 일부러 한국어로 인사했다.

"어머, 한국말 잘하시네요!" 이 말을 듣고 친구는 부러움과 선망이 엇갈린 표정을 짓고 있었다.

다음엔 친구 차례다. 하지만 그건 생각처럼 쉽지 않았다. 길을 잃었을 때 내가 친절해 보이는 사람을 찾아서 친구의 등을 떠밀었다. 그런데 대답은 유창한 영어로 돌아왔다. 그리고 식당에서 친구가 용기를 내서 "우롱차 있어요?" 라고 물었는데 젊은 남자 점원은 아무 말 없이 따뜻한 보리차를 가져다 주었다. 우리는 그냥 간단한 한국어 대답을 듣고 싶었을 뿐이었는데.

기대했던 성과는 거두지 못했지만 우리는 여행을 만끽했다. 부산은 경치도 좋고 맛있는 것도 많고 우리는 더할 나위 없이 즐겁게 지냈다.

그러다가 여행 마지막 날.

우리는 백화점에 여행 선물을 사러 갔다. 매장은 텅 비어 있었고 끈질긴 판매원들에게 질리면서 나는 한국어를 모르는 척했다. 눈을 마주치지 않고 상품만 보면서 지나갔는데 같이 있던 친구가 안 보였다. 착한 친구는 한 판매원 아줌마에게 붙잡힌 것 같았다. 가 볼까 말까 망설였는데, 그때 친구가 얼굴 가득 웃음을 터뜨리며 달려왔다. "통했어! 통했다고!" 그 판매원이 친구가 한 말에 한국어로 대답해 주었다고 한다. "아싸!" 우리는 매장 통로에서 깡충깡충 뛰면서 손을 맞잡고 기뻐했다.

결국 여행 선물은 그 아줌마에게서 사기로 했다. 아줌마는 우리와 나이가 비슷하고, 일본어를 공부하는 대학생 딸이 있다고 했다. 그리고 내가 찾던 물건에 대해 아주 친절하게 상담해 주었다. 계산이 끝났을 때 뒤에서 아줌마가 달려왔다. 그리고 주머니에서 뭔가를 꺼내서 내 손에 얹어 주었다. 그건 두 손바닥에 가득 찬 알록달록한 알사탕이었다. 나는 아줌마의 따뜻한 마음이 너무 기뻤고 동시에 그 사탕이 마치 아까 본 친구의 반짝반짝 빛나는 눈동자처럼 보였다.

한국어를 배우기 시작했을 때 나도 같은 눈을 하고 있었을 텐데. 처음에 말이 통했을 때의 기쁨과 감동을 친구 덕분에 다시 떠올릴 수 있었다. 그 때 받은 사탕은 먹기가 아까워서 아직도 내 책상 위에 놓여있다.

佳作

한국식을 느낀 어학당 생활

小林友仁〔鵠沼高等学校〕

“밥 먹었어?” “오늘 뭐 했어?” 이런 말속에서 나는 한국을 느낀다. 그리고 이 느낌이 내가 한국을 좋아하는 큰 이유중의 하나이다.

나는 작년 여름에 한달 동안 이화여대 어학당에 들어갔다. 한국에 있는 동안 기숙사에서 살게 되었는데 그곳에서 어떤 아주머니와 만났다. 그 아주머니는 기숙사에서 청소나 식사를 준비해주시는 분이었다. 아주머니는 기숙사 식당에서 밥을 먹고 있을 때 말을 걸어주시고 혼자 첫 해외 생활에서 긴장하고 있는 나에게 여러 가지로 친절하게 이야기해 주셨다. 그래서 나는 아주머니와 빨리 친해졌다. 아주머니가 만들어 주신 한국 요리는 본 적도 없는 것이 많았지만 어느 것이나 맛있었다. 나는 그 맛있는 요리를 먹으면서 아주머니와 대화하는 것이 아주 재미있었다. 기숙사 생활은 뭔가 쓸쓸하고 허전할 거라고 생각했던 나는 이야기를 들어주시는 분이 있다는 것이 정말 고맙고 든든한 기분이 들었다. 또 아주머니는 내가 아침밥을 먹고 있으면 항상 접시 위에 여러 반찬이나 김치를 놓아주시고 “왜 반찬만 먹어!” “밥 먹어야 돼 밥!” 이렇게 말씀하시면서 밥공기 위에 계란 프라이를 얹어주셨다. 그렇게 가족도 아닌 사람의 식사 걱정까지 해주신다는 것이 신기하면서 동시에 이 한국 특유한 배려심이 무척 기뻤다.

“밥 먹었어?” “오늘 뭐 했어?” 이것은 기숙사에 돌아오면 아주머니가 매일 걸어주시던 말이다. 이 말속에는 그냥 문장의 의미만 있는 것이 아니고 상대방에게 신경 쓰고 관심이 있다는 것을 표현하는 인사의 역할도 있다고 느꼈다. 나는 아주머니와에 경험을 통해 그 인사가 바로 한국 사람에게 있는 인정과 성격을 잘 나타낸다고 생각한다. 한국 사람의 대가를 요구하지 않는 부드러움에 감동을 받은 것은 유학 중에 한 두 번이 아니었다. 그때마다 나는 마음이 따스해지고 그런 사교적이고 따뜻한 문화를 가지고 있는 한국이 더욱더 좋아졌다. 실제로 한국에 가서 한국 사람들에게서 흐뭇해지는 대접과 배려를 접하게 되면서도 마치 가족처럼 가까운 거리에 놀라는 경우도 많았지만 언제나 마음이 훈훈해지고 고마움이 너무나 컸다. 이런 경험들로 인해 나는 더 열심히 한국어를 공부해서 한국 문화를 알고 많은 사람들과 자유롭게 교류하고 싶은 마음이 생겼다. 그리고 언젠가 성장한 내 한국어로 아주머니를 찾아가 꼭 감사의 말씀을 드리고 싶다.

佳作

부여 여행기

隠樹紀子〔東京都〕

요전에 서울여행을 갔을 때 당일치기로 부여에 갔다왔다. 부여에는 몇 년 전 봄에도 가본 적이 있었지만 이번엔 이 계절에만 볼 수 있는 만개한 궁남지의 연꽃을 꼭 보고 싶어서 다시 방문하기로 했다. 3 월에는 회색빛이었던 궁남지가 지금은 몇 천, 몇 만송이의 분홍색과 흰색의 연꽃들로 화려한 여름의 풍경을 자아내고 있었다. 그렇게 많은 연꽃들을 마주한 것은 처음이었다. 불교에서도 극락 정토에 피는 꽃이라고 하는 연꽃을 보니, 곧 비가 내릴 것 같은 무더운 날이었지만 아주 상쾌한 기분이 되었다.

부여는 백제 시대의 수도였던 옛 고도다. 처음에 갔을 때, 마치 백제 시대로 타임슬립한 것 같은 기분이 들었던 것이 아직도 기억난다. 2015 년 유네스코 세계 문화유산으로 등록되었기 때문에 많은 관광객들이 찾아서 옛날의 모습이 변해버리지는 않았을까 걱정했는데 그곳에는 여전히 여유로운 시간이 흐르고 있었다. 호류지가 있는 일본 이카루가 지역을 찾았을 때와 같은 시간의 흐름을 느꼈다. 그것도 그럴것, 당시의 일본과 백제는 깊은 친교가 있었다고 한다. 또, 구 백제를 지원하기 위해서 일본 (당시의 “와” 국) 이 대군을 파견했지만, 당과 신라의 연합군에 대패했다는 “백강 전투” (663 년) 의 무대는, 바로 부여 도착 직전에 건넌 금강이었다고 한다. 6-7 세기 당시의 일한 교류에 점점 흥미가 생겼다.

백제 시대의 성터였던 부소산성도 1 시간 정도 산책했다. ‘영일루’ 라는 이층 누각 건물에서 보이는 시내의 파노라마는 주작큰길을 중심으로 펼쳐져 백제 시대의 모습을 충분히 상상시켜 주었다. 또 5 층석탑이 남아 있는 정림사지에도 가봤는데 남대문, 탑, 금당, 강단이 일직선으로 배치되어 있는 백제양식은 ‘성덕태자’ 가 세운 오사카의 ‘시텐노지’ 에도 그 영향을 볼 수 있단다. 마지막으로 방문한 능산리 고분군에도 마찬가지로 일본과의 문화교류를 볼 수 있었다. 나에게는 이번 여행은 천 년을 넘는 일한교류에 대해 생각할 귀중한 기회가 되었다.

그날 동행한 가이드의 박식에는 몹시 놀랐지만 특히 백제 무령왕이 태어난 ‘가카라지마’ 에 관한 이야기가 아주 재미있었다. 사실은, 나도 처음 들은 지명이었다. 그곳이 규슈 본토에서 페리로 20 분 쯤 걸리는 섬이며, 거기에서 먹은 오징어가 아주 맛있고 주민들의 다정함은 잊을 수 없는 추억이 되었다고 한다. 원래 사람과 사람과의 교류는 그런 것에서 시작하는 게 아닐까? 그런 생각을 하면서, 일한 관계가 전후 최악이라고 말하는 요즘이 너무나 아쉽고, 한시라도 빨리 관계가 정상화되기를 바란다.

最優秀賞

清水律子〔福島県〕

扶余の風　悠久 想い　チマひらり

優秀賞

菅原文路〔埼玉県〕

少女時代　歌う私は　介護時代

相田香菜子〔神奈川県〕

ビビンパの　混ぜが足りぬと　混ぜられて

佳作

中野弘樹〔埼玉県〕

行き交えば　絡んだ紐も　解けてゆく

板垣光行〔新潟県〕

韓国語　妻と娘に　つづくパパ

川島多香子〔東京都〕

ガイド本　付箋貼りすぎ　地図見えず

中山友里奈〔埼玉県川越市立福原中学校〕

縁側やソウルに届く天の川

最優秀賞

後藤将司〔東京都〕

어서오이소 사람냄새 넘치는 자갈치시장

優秀賞

國定昭〔大阪府〕

정말 부럽다 한국인의 칼 대답 예스 아님 노

中西麻維〔奈良県〕

이건 뭐예요？언제 끝날지 모를 한식당 식사

佳作

新澤明子〔大阪府〕

골목에 있는 할배도 아트같은 한국 마추픽추

南圭子〔千葉県〕

갈치의 커튼 은빛 반짝거리는 자갈치 시장

国原綾子〔神奈川県〕

황금 주전자 옛날에는 보리차 지금 막걸리

大江千晴〔東村山市〕

조각보 한장 한땀한땀 꿰어맨 어머니 마음

韓日交流
作文
コンテスト

駐日韓国文化院 www.koreanculture.jp

駐大阪韓国文化院 www.k-culture.jp